

---

# リアライズ

伊勢之 剛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リアライズ

### 【Nコード】

N9867V

### 【作者名】

伊勢之 剛

### 【あらすじ】

『思力』それは心で思った事を伝え感じることが出来る力。超能力でも魔法でもなく、すべてのヒトに等しく備わった能力。

『思力』の発見から20年、人間社会はあらゆる場面でその恩恵を受けていた。高校1年生の三咲一真も、そんな社会の一員として平凡な毎日を送るはず、だったのだが……。

この作品は「Arcadia」様へも投稿しております。

(1) 日常 ～プロローグ～

目覚まし時計のけたたましいベルの音が鳴り響く。

何回目だろうか、ベッドから伸びた手がボタンを押して音が止まる。

三咲家で毎朝繰り返される風景だ。

一呼吸の後、ベッドから跳ね起きた少年が時計をつかみ取り、午前7時50分を回っていることに驚愕の声を上げるのも、またいつものことであった。

少年はクローゼットから引っぱり出したカッターシャツとスラックスをあわてて着込み、ブレザーの袖に腕を通しながら床に転がっていた鞆を掴むと部屋を飛び出した。

いや、正確には部屋を出る直前にリターンし、机の上に無造作に放り出されていた『忘れ物』をつかんでまた走り出す。

それは、短いカチューシャのような、言い換えればアルファベットの『C』のような形をしていた。

少年が首の後ろから髪の毛の生え際辺りにそれをはめ込むように装着すると、視界の左上に現在時刻がデジタル表示で浮かび上がった。

AM 8:01

遅刻回避のタイムリミットまで30分を切ってしまった。

階段を一気に駆け下り、玄関へ直行する少年の後ろから母親の聲が追いかける。

「一真！朝食くらい食べて行きなさい！」

「無理無理！そんな暇なし！」

少年、三咲一真はスニーカーに両足をねじ込むと、靴箱の中から学校指定のローファーを取りだして靴の中に押し込む。これから始まるマラソンに革靴は不向きだ。

「行つてきまーす！」

玄関から勢いよく飛び出した少年ランナーが、閑静な住宅街の中を駆け抜けていく。

と、見通しの悪い十字路口にさしかかる。

一昔、いや二昔前の少女漫画なら、角から曲がってきた転校生と正面衝突して運命の出会い、となるところだ。小道具としてトーストでもくわえていれば完璧だったろう。

実際、一真の進行方向右手から十字路口の角を曲がるうとしていた人がいたが、それは転校生の美少女などではなく、犬を連れた散歩途中の初老の紳士だった。

そして現実には、生憎とちょっとやそつとでは正面衝突などしないようなシステムが張り巡らされている。

一真もその紳士も相手の姿は見えていないが、お互いが十字路に向かつて近づいていることは百も承知だ。

十字路口に立てられた道路標識にはセンサーが埋め込まれており、熱源の接近を感知してその位置をリアルタイムで発信し続けている。その情報を受け取った一真はあらかじめ道路の反対側へとランニングコースを変えていたし、紳士の方も犬のリードを短くしていた。何事もなく十字路口を通過して二人の距離は遠ざかっていく。

こうして運命の出会いをすることもなく、マラソンは続いた。

一真の自宅から彼が通う一条学園高等学校へ行くには、通常、大通りへ出てバスに乗るが、利用するバス路線は市内中心部に位置する丸山公園の広大な敷地の外縁に沿っているので、大回りとなって

しまう。

おまけに途中で乗り継がなくてはならないことから、必ずしも最速というわけではなく、距離的には、丸山公園を突っ切っていく方が最短ルートになる。

あとはバスの運行ダイヤと、乗り継ぎがスムーズにいくかどうか  
が鍵だ。

(ええと、バスの時刻は、と…)

視界の右端に、市の交通局が提供している市バス時刻表検索システムの画面が現れた。

地図情報サービスとリンクさせ、現在地からバスを乗り継いで学校まで行く場合の所要時間を計算させると、待ち時間を含めて21分25秒、到着時刻は午前8時30分31秒と出た。

これではいけない。31秒の遅刻だ。

(公園を突っ切るルートは…)

このままの速度で走った場合の予想到着時刻は午前8時29分55秒。

わずかな可能性に賭けることにした。

彼がこれだけ遅刻回避にこだわるのには深刻な理由がある。

今日は5月31日、5月に入っすでに9回の遅刻を記録している。

一条学園の生徒規則には、

『同一の月内に10回以上遅刻した生徒は、10枚の手書きレポートを提出すること』

との条項がある。レポートと言えば響きはいいが、要するに『反省文』のことだ。

社会のあらゆる場面においてペーパーレス化が進んでいる中、教育の現場は古来からある『紙』を見捨てることなく使い続けている。もちろん、普段の授業では電子化された教科書と各生徒の机にビルトインされた情報端末を使用するが、反省文のように『指導 おしおき』に類することとなるとアナログデバイスの出番だ。

この国の教育者達は『手で文字を書く』という行為に教育効果があると信じているわけだ。

大多数の高校生と同じく、文字を書くことが苦手な一真にとっては、何としても通称『10レポ』だけは避けたい。

今日を乗り切れば明日からは6月、遅刻回数もリセットされる。

そんなことを考えながら走っていると、目の前に巨大なゲートが見えてきた。

市内最大規模を誇る丸山公園は、面積約110ヘクタール、敷地内には池や丘があり、市民の憩いの場となっている。

東南に位置するゲートをくぐって敷地内へと入った一真は、しばらく遊歩道を走っていたが、子供用の遊園施設に突き当たる手前でコースを左へ外れて柵を跳び越え、まばらに生える木の間を縫って学校までの最短ルートをひた走る。

遊歩道を通って行ったのでは、学校のはるか北に位置するゲートから出ることになり、時間をロスしてしまう。

雑木林を突っ切って公園外周の塀を乗り越えれば、高校の正門から東へ約300メートルの地点に出ることができるのだ。

市民公園ということもあり、外周にセンサーなどの防犯設備が設置されているわけではないので、最短ルートを通った一真が最終段階で塀を飛び越えたとしても、別に咎められることはない。

一真の目に低いコンクリート製の塀が見えてくる。まるで最後のハードルのように。

.....

生徒指導部長を努める小川栄三は、正門前で仁王立ちになっていた。

学生時代にラグビー選手として鳴らした均整の取れた筋肉質の体は、一見すると体育教師の外見だが、れっきとした古典を教える国語教師である。

彼の視界の右側には、現在までの登校生徒数『751名』が表示されていた。

学校の各門に設置されたセンサーが登校してきた生徒の個別IDを検知して、誰が校内にいるのかが瞬時にわかるシステムになっている。

全校生徒数は758名、事前に病休などで欠席の届け出があった生徒は6名、差し引き残りはたったの1名。

システムにアクセスすれば、最後の一人が誰だかすぐにわかるが、敢えてそれをしなかったのは、残っているのが誰なのか分かりきったことだからだ。

「小川先生」

若い教師が歩いてきた。

小川と同じ生徒指導担当の萩原だ。

「あと一人ですねえ」

「ああ、そうだな」

「今月のあいつの『スコア』は？」

「9回だ」

「オーラスでリーチですか。ま、この場合、当たり牌は来て欲しくないでしょうけどね」

萩原にも最後の一人が誰なのか分かっていった。

続けて萩原が何か言おうとしたちょうどその時、腕組みをしながら最後の一人を待つ小川の目に、直線走路に入ってきた少年ランナーの姿が映った。

.....

公園外周に設置された塀を飛び越え、ゴールまで残り300メートルとなった時点で、一真には時刻を確認しながら走る、などという余裕はもはや無かった。

タイムリミットを告げるチャイムが聞こえてくるのが先か、校門というゴールテープを切るのが先か。

一条学園を含めたほとんどの学校では、いまだに日課時限を区切る合図として校内へのチャイム吹鳴という手段を用いており、当然、登校のタイムリミットである午前8時30分も例外ではない。

学校の敷地内に多数設置されたスピーカーから、おなじみのメロディーが聞こえてきた瞬間、全ての努力が水泡に帰す。

(鳴るな、頼むから！)

心の中で念じながら、ラストスパートにすべてを賭ける。

徐々に大きく見えてくる校舎、そして、まるで門番の様に不動の姿勢で待ち受ける教師。

あと一息でレポートのプレッシャーから解放される。

そんな思いが少年の心に浮かんだ瞬間、ゴールまで残り5メートル



ルのところで無情にも時計の針は午前8時30分を通過した。

約6キ口を走り抜いた少年ランナーは、すぐに止まることが出来ず、もつれる足で正門から中へと転がり込んだ。

「残念だが三咲、3秒遅刻だな」

ゆっくりと近づいて来た小川が、地面に大の字になった一真を見下ろしながら無慈悲に宣告する。

「でも先生。まだ…チャイム…鳴ってないですよ」

息を整えようと努力をしながら、一真は何とか言い訳を試みる。なに馬鹿なことを、と言わんばかりの顔で小川が、

「チャイムは鳴っただろう。とつくに8時半を回って…」

そこまで言ったところで、校舎のスピーカーから流れてくるウエストミンスターの鐘のメロディーが言葉を遮った。

「ほ…ほらね…」

何とか体を起こした一真の声を半ば聞き流しながら、小川は訝しげな顔で校舎を仰ぎ見る。

壁面に埋め込まれた古めかしい2針式丸時計の針は、8時32分を指し示すところだった。

「規則には、登校時刻は午前8時30分と明記されている。遅刻は遅刻だ」

「で、でも先生、『日課時限の開始はチャイムの吹鳴を合図とする』とも書いてありますよ」

一縷の望みを託して最後の抵抗を試みる。

「先生。ここはひとつ、痛み分けって…ことで…」

「三咲、いつものことだが言葉の使い方、間違ってるぞ。痛み分けってというのはだな…」

何とかレポートから逃れようと言い訳を繰り返す一真を、やれやれといった表情で見っていたが、腕組みを解きながら根負けしたように言った。

「まあいい。今日だけは特別に『痛み分け』にしておいてやる。早く教室へ入れ」

「あ、ありがとうございます」

息も絶え絶えに答えると、一真はふらつく足で立ち上がる。

「三咲、何とかレポートは免れたみたいだな」

後ろから萩原がかけた言葉に、振り向きながら声にならない笑みで返事をして、一真は校舎の方へと去っていく。

「小川先生、これで全員ですね」

「ああ」

萩原に生返事を返しながら、小川の視線は校舎の時計へと注がれていた。

「どうしたんですか？」

「いや、チャイムが遅れて鳴るなんて変だと思ってな」

「えっ、本当ですか？全然気がつかなかったなあ」

「間違いない。きっかり2分、遅かった」

「おかしいですねえ。確か昨日、メンテ業者が校内システムの完全チェックをしたって教頭先生が言ってたのに。業者のミスですかねえ」

「もう一度点検してもらった方がいいかもしれんな」

小川は校内セキュリティ・システムにアクセスすると、コントロールパネルを視界に表示させ、正門の状態を『閉』へと切り替える。ガラガラと大きな音をたてながら、門扉がレールの上をスライドしていく。

チャイムについての話はそこで終わり、二人の教師の話題は夏休み前に行われる全校指導へと移った。

その段取りについて話しながら職員室へと戻っていく二人の背後で、鉄製の扉が鈍い音をたてて閉まった。

## (2) テクノロジー

レポートの恐怖をひとまず回避した一真は、這いつくばるようにして何とか2階にある教室までたどり着いた。

窓際の、前から2番目に位置する自分の机に突っ伏していると、クラスメイトの一人がさつと近寄ってきて声を掛ける。

「なあなあ三咲、間に合ったのか？どうなんだ？」

その声には、人の不幸を期待する響きが多分に含まれていた。相手が一番仲の良い友人である生野忠典だったので、腹を立てることもなく質問に答えるが、それ以外の者だったなら『うるさい』のひと言で済ませていたかもしれない。

「お前の期待を裏切って悪かったな。ギリギリ、徳俵一杯でうちやり決めてやった」

時々、高校生らしくない表現を使う一真の言葉に、一瞬、頭の中に疑問符が浮かんだ忠典だったが、そこは慣れたもの、『遅刻せずには済んだ。よって10レポは無し』と脳内で変換した。

あからさまにがっかりした口調で、

「へー、そりゃ良かったな」

と心にもないセリフを棒読みで口にする。

不幸に見舞われる友人を見るという、いささか趣味の悪い楽しみを取り上げられてしまった忠典は、どうでもいいといった気のない口調で話を続ける。

「そついやさ、1時間目の『思力概論』の授業、ビデオ見るんだつてさ」

対する一真も、机にあごを乗せただらしない格好を崩すことなく言葉を返す。

「中学でさんざん見させられた奴かなあ？もう飽きちまったけどな」「いや、そつじゃなくて、もうちよつと大人向けのビデオみたいなこと言つてたな」

「言つてたつて、誰が？」

「4組の亀山。昨日授業があつたんだつてさ」

一条学園高等学校は一学年に8つのクラスがある。

1組が超難関大学への進学を目指す『特別選抜進学クラス』、2組が国公立や難関私立大学を目標に外部受験をする『選抜進学クラス』、残りの3〜8組は、同じ一条学園グループ内の大学への内部進学組である『進学クラス』となっている。

一真や忠典の属するのは進学クラスである5組。

よほどのことが無い限り、系列大学への進学は保証されたも同然であるので、進学クラスの生徒にとっては、勉強に対するモチベーションの維持が課題といえる。

試験がない教科では、尚のことやる気を起こすのは難しい。

そつといった教科の一つである『思力概論』の授業は、一真にとって一息つくための時間くらいの存在でしかない。

ましてやビデオの視聴である。

ビデオを見る時には室内の照明を落とすし、教師も教室の後ろに置いた椅子に座つて一緒に見ているだけなので、前から2番目という一真の席は、何をしても気付かれにくい絶好の位置にある。

上映会が始まってしまえばこつちのもの、適当なところでお休み

モードに入ればいい。

疲れた体には休息が必要だ、などと都合のいいことを考えていると、教室のドアが開いて担任教師の五十嵐が入ってくる。

慌てて席に戻る忠告を横目で見ながら、一真の頭の中は、いかにして気付かれずに眠りの世界へ没入できるか、その算段を考えていた。

「今日の授業はビデオを見てもらう。」

これまで小・中学校で思力に関する視聴覚教材を見てきたと思うが、今日のは教材じゃなく思力というものが初めて世間に紹介されたときのテレビ番組だ。

思力の使い方については、中学卒業までに一通り勉強してきたと思う。

高校の授業は、思力というものが普及してきた背景や社会に与えてきた影響について考えていくことが主となる。

まあ、難しく考えないでリラックスして見ればいい」

五十嵐はそこまで言うとお教壇を下りて教室の後ろへと歩いていくとしたが、ふと一真の顔を見て、

「寝るなよ」

ひと言釘を刺す。

教室のあちこちで押さえた笑いが起こる。

教室の照明が落ち、スクリーンに映像が流れる。

通常の授業では、各生徒の机にビルトインされた端末のディスプレイを使用する。

簡単な動画なら、各人の視神経へ直接映像を投影することも可能である。

そのどちらでもなく、教室の前の壁に埋め込まれたスクリーンに

映像を映すのは、『みんなで一つの画面を見る』ことで、クラスの一体感というものの醸成を期待しているのだ。

『紙』を使ったレポートといい、チャイムといい、このスクリーンといい、学校という組織はなかなか古い方法論を捨てきれずにいる。数秒後、一人の男が映し出された。

40代前半に見えるその男は、ベージュのジャケットにノーネクタイといった出で立ちで立っていた。なかなかの男前である。

「テレビをご覧の皆さんは、以心伝心という言葉をご存じでしょうか。あるいは、阿吽の呼吸。

いずれも、言葉に出さなくても自分の気持ちが相手に通じることです。

では、これらが科学の力で証明できるとしたら？

これから皆さんに、それを可能にする力、『思力』というものを説明していきましょう」

ここで唐突に場面が変わる。

丸いテーブルを挟んで、先ほどの男とテレビ局のアナウンサーが向かい合って座っている。

タイトルやコマーシャルをカットして編集したのだろう。

「早明浦教授、思力という言葉は初めて聞くのですが？」

「一言で言えば、文字通り『思いを伝える力』のことです。

具体的には、心の中で思い浮かべた事柄を一種の波動、私は『思力波』と呼んでいます。この思力波に乗せて外部へと発信することで情報を伝達する力のことなのです。

身近なところで言えば、思力を使うことで携帯電話のように遠く離れた友達とおしゃべりできるし、リモコンが無くてもテレビのチャンネルを自由に変えられる。

思力を感じるセンサーを組み込めば、あなたが心の中で思うと

おりに機械を制御することができるのです。

「それも小難しい理論は抜きで、直感的な操作が可能となります」  
「教授、いまの話だけを聞いていると、失礼ですが夢物語にしか聞こえません。」

魔法とか超能力とか、そういった類のものと同列にしか考えられないのですが……」

教授と呼ばれた男は、アナウンサーの言葉を頷きながら聞いていたが、ゆっくりとした口調で答える。

「確かに、突拍子もないことと思われるのは当然です。」

私自身も思力というものを発見したとき、そう感じましたから。

しかし、私は科学者です。根拠のない絵空事を主張したりしません。

実験を繰り返した結論として、私は思力というものが存在すると確信したのです。

勘違いして欲しくないのは、思力とは魔法や超能力などではなく、見たり、聞いたり、しゃべったり、歩いたり、掴んだり……そういうことと同じように、もともと全ての人に等しく備わった力だということす。」

「それでは何故、今まで思力というものが発見されなかったのでしょうか？」

「その理由として、人の発する思力波が極めて小さい、ということが挙げられます。」

そして特殊な波動であることから、今までのセンサー類では捉えることが出来なかったのです。

あなたが私に向かって、何か伝えようと心の中で思ったとしまし  
よう。

その内容は思力波に乗ってあなたから発信され、私はそれを受け  
取ります。」



しかし、あまりにも思力波のレベルが弱いために認識することができない、受け取ったことすら気が付かない。

それでは思力を利用することが出来ない。

どうしても思力を増幅する機械が必要になるのです」

そこでアナウンサーが、テーブル上に置かれた物を指し示しながら言った。

「それがこの機械、というわけですか」

「そうです。これが思力増幅機です」

そう言いながら、ヘッドフォンのような形をした装置を手取る。

「これを頭につけると、その人が発する思力波を増幅し、もう一度その人にフィードバックする。人は増幅された思力波を改めて外へ向けて発信する、というわけです。

ただし、この機械は人の思力波を増幅するだけで、発信する機能はついていません。

あくまでも思力波を発信するのは生身の人間なのです」

(へー、昔はあんなに大きかったのか)

一真は頬杖をつきながら、予想に反して眠気がなかなか襲ってこないことに疑問を抱きながら映像を眺めていた。

その手は無意識の内に、首の後ろにはめ込まれた機器を触っていた。

危つく自分の部屋に忘れそうになった『それ』は、表面が肌色なので、皮膚と同化して見分けが付きづらい。

男の言葉が続く。

「私たちは思力についての実証実験を計画しています。」

私が所属する西都大学の学生を対象にして、この思力増幅機をつけて日常生活を送ってもらおうのです。

家電製品や照明器具などに思力を感知するセンサーを組み込んで、日々の生活の中で使用してもらいます。

先ほど申し上げたように、それらの操作はすべて自分の頭の中で思うだけで出来るようになっていきます。

私は『感覚制御』と呼んでいます。『なんとなく』とか『だいたいこんな感じ』というように、抽象的なイメージングでも制御可能なところに特徴があります。

受け手の機器には、新しいアルゴリズムを持った制御プログラムを実装しており……」

番組はまだまだ続いていたが、技術的な説明になってくると、どこかに隠れていた眠気がようやく姿を現した。

予定通り、さしたる抵抗も見せずは無条件降伏した一真は、安らかな眠りの世界へと落ちてゆく。

### (3) 続・テクノロジー

『思力』という概念が世に公表されてから、ちょうど20年が経過しようとしていた。

その内容から言えば、オカルト系の雑誌が取り上げるか、せいぜいテレビの情報系バラエティ番組で、イロモノとして紹介される程度で終わるはずだった。

人々の記憶にも残らず、数多ある疑似科学の一つとしてマニアの間で語られる位が関の山。

しかし世間の反応は違っていた。

思力に関する一大論争が巻き起こったのである。

それは、思力を『発見』した早明浦教授が、国内最高峰の教育機関である国立西都大学において教鞭を執り、当時42歳の若さで工学部の学部長を務め、さらには次期西都大学総長候補の最右翼と目される気鋭の研究者であったことと無関係ではない。

親しみやすい人柄と、難解な科学技術をわかりやすく説明する語り口、そしてなによりルックスの良さからメディアでも引つ張りだこであり、学者でありながらテレビやラジオのレギュラー番組を持つほどの有名人でもあった。

それほどの人気を持つ科学者の言葉に、世論は真つ二つに割れた。肯定論者は夢の技術とまではやし、否定論者は似非科学とまでこき下ろした。

論争の結末はといえば、思力に関連する技術が急速な発展、拡大を遂げ、今や社会に無くてはならないものになっている現状から言わずもがな、である。

それまで電波や赤外線を利用してきたワイヤレスインターフェイ

スは、ほぼ全てが思力を利用したシステムへと取って代わられ、家庭からテレビやエアコンのリモコンが消えた。

例えばチャンネルを変えたいと思ったら、思力波によりテレビにアクセスして番組表を入手し、見たい番組を頭の中で選ぶだけで事足りる。

テレビから提供される番組表の画像は、データを視神経に直接送り込むことで視野に映し出される。

フルハイビジョン並の画質とまではいかないが、モニターやゴーグルといった機器を必要とせず映像を『見る』ことが可能となった。

ありとあらゆる機械に思力を感知するセンサーが組み込まれ、人は頭の中で思い描くだけでそれらの機械を操作することが可能となり、それこそテレビのチャンネルからジェット機の操縦に至るまで、程度の差はあれ、思力による制御を用いない機械は無いと言い切れるほどそのテクノロジーは普及していた。

思力が社会に根付き生活に不可欠なものとなったことから、思力の使い方はもちろんのこと、付随する様々な事象や問題などに関して子供のうちから教育する必要があるとして、国の定める学習指導要領には思力関連の授業が盛り込まれた。

義務教育修了までに、基本的な思力制御の方法といった実技面や理論など、一通りの知識を身に付けるようになっていた。

思力についてのカリキュラムを組んでいる高校も少なからず存在した。

一条学園では、1ヶ月に1回の割合で思力に関する授業が組みまれており、技術論だけでなく、その歴史や背景といったところまで掘り下げる内容となっている。

一真達が見ているビデオも、そうした教育の一助として利用されているのだ。

.....

2時間目も残りわずかとなり、五十嵐は番組の途中であるがスクリーンをオフにし、教室の照明を点灯させる。

はっとして目が覚めた一真だが、覚られないようにあくびを噛み殺し、さも『ずっと起きていましたよ』と言わんばかりに机上端末を操作するフリをしていた。

「思力概論の授業はテストもないし、休憩時間と勘違いしている者もいるみたいだが……」

教壇に上がった五十嵐は、チラリと一真の方に視線を向けると言葉が続けた。

「担任の俺が教えているんだから、授業態度は平常点に加算されるということをお忘れなよ」

学内での成績は、定期テストの点数の他に生活態度などによる平常点が加味されて決定する。

テストで赤点を取ると追試だが、平常点が悪い場合はまたもや『レポート』である。

「じゃあ、授業が終わる前にビデオの内容について質問してみよう。ちゃんと見ていた者にとっては、簡単な質問だけだな」

口元に意地の悪い笑みを浮かべる。

(なんだよ、それ。まるつきり俺狙いじゃんか)

今度は早くチャイムが鳴ってくれと願う。

しかし、そうそう奇跡は起こらないだろう。

目が合わないよう端末のモニターに視線を落としていたが、そんな抵抗は無意味だと十二分に理解している。

教壇から教室内をわざとらしく一回見回した五十嵐は、さっきとは違い、はつきりと一真の顔を見据えた。

「じゃあ……」

三咲、と言おうとしたその瞬間、スピーカーからチャイムの音が鳴り響く。

あきらめの境地に片足を入れかけていた一真には、その音色が救世主の到来を告げる合図に感じられた。

「ん？もうそんな時間か？」

だが時計の表示では、2時限目の授業はあと3分残っている。

五十嵐が何か言おうと口を開きかけたが、それを遮るように一真の前の席に座っている日直の池原が間髪入れずに起立の号令をかけると、教室内の生徒が一斉に立ち上がる。

生徒達に気押されるように、五十嵐は首を捻りながらも授業を終わりにせざるを得なかった。

「次は…阿佐ヶ谷先生の体育だな。」

お前達、遅れないように急いで行けよ」

教師としての対面を何とか保ちつつ、しかし釈然としないまま五十嵐は教室を出て行った。

(4) 予兆

体育の授業では当然のことだが、トレーニングウェアに着替える必要がある。

生徒達は体育館の1階にある更衣室へ向かって三々五々、教室を出て行く。

「池原、ナイスだ、助かった。恩に着る」

まるで神を崇めるような口調で、一真は感謝の言葉を並べた。

「いいて、いいて。困ったときはお互い様だからな。今度、何かあったら助けてくれればいいさ」

「ああ、わかった」

池原が席を離れるのと入れ替わりに、またもや友人の不幸を見損ねた忠典が近寄ってきた。

「またまた奇跡に助けられたんじゃないやねえの？」

その言葉には、努力もしないのに危機的状況を紙一重ですり抜けていく、そんな悪運の強さに対する呆れたような響きが含まれていたが、当の本人は友人の皮肉には気付かず、鼻の穴をふくらませて答える。

「二度あることは三度ある。今日の俺はもう一回くらい奇跡を起こせそうだな」

「そうだったらいけどな。」

次の体育は『鬼ヶ谷』だから絶対遅れられないし、早く行こうぜ」  
「先に行つててくれないか、俺、トイレ寄つてくから。もうヤバイ  
くらい限界近いし」

「了解、了解。遅れるなよ」

そう言いながら教室を出ようとした忠典は、ふと立ち止まって一  
真の方を振り返ると、口元に意地の悪い笑みを浮かべながら、何か  
を期待するような口振りで言った。

「三度目の正直つてのもあるからな」

.....

トイレから出てきた一真は、人もまばらな廊下を足早に進む。

まだ次の授業に間に合うだけの余裕はあるが、『鬼』とあだ名さ  
れる体育教師のことを考えると、自然と歩く速度が早くなる。

そして廊下から階段へと曲がる瞬間。

「あつと、ごめん」

階段を上がってきた生徒と危うく出会い頭に正面衝突しそうにな  
った一真は、飛ぶように横へ避けて難を逃れる。

「こちらこそ、ごめんなさい」

ペコリと頭を下げたのは、顔に幼さが残る女子生徒だった。

頭頂部が一真の肩辺りに位置するくらいの小柄な体は、ちよつと  
高校生には見えない。



(中等部の子か)

一真が咄嗟にそう思ったのは、30センチ近い身長差だけが理由ではない。

学校法人一条学園は、グループ内に小学校から大学までを擁しており、そのうち中学校と高校が同じ敷地内に所在している。

校舎は別々だが、体育館やグラウンド、講堂などの施設は共用なので、校内で中高の生徒が顔を合わせる機会はいくらでもある。

制服は共に同じ濃紺のブレザーだが、ネクタイの色が中学校はブルーのストライプ、高校はワインレッドであり、ハイソックスも中学校は白色だが高校は紺色が指定となっていることから、制服姿であれば中学生と高校生を外見で見分けることが可能だ。

ぶつかりそうになった女子生徒は、中学校のフォーマットに則った制服を着用しており、一目でそれとわかる。

「失礼します」

もう一度頭を下げると、左右で束ねた栗色のロングヘアを揺らして廊下を遠ざかっていく。

(でも、あの子、どこへ行くんだ?)

華奢な後ろ姿を何気なく見送りながら、一真はふと疑問に思った。廊下の先は高校1年生の教室が並んでいるだけであり、中高共用の体育館や講堂へ行くには方向がまるっきり反対である。

(兄ちゃんか姉ちゃんでもいるのかな)

実際、一条学園では兄弟姉妹で通っている生徒は多く、一真のク

ラスにも弟妹が中学校に在学している者が数人いたはずだ。

その時、一真の考えを授業開始5分前の予鈴が現実へと引き戻す。

(やべっ、遅れる！)

着替えの時間を考えるとギリギリだ。忠典の言うとおり、3度目の正直になりかねない。

いつも苦虫を噛みつぶしたような顔をしている体育教師を思い浮かべながら、一真は体育館へ向かって階段を駆け下りていった。

.....

放課後の校内は、授業中とは違う、ある種の活気に満ちている。

残って友人とおしゃべりに興じる者、クラブ活動へと急ぐ者、頭を抱えながら補習を受ける者、連れだって帰宅する者……。

いわゆる『帰宅部』の一真は、ホームルームが終わると帰り支度もそこそこに教室を出ようとしたが、寸前で忠典に呼び止められた。

「三咲、今日ヒマ？俺、買い物行くんだけどさ、付き合ってくれないかな」

「あれ？クラブはないのか？」

「土日と連チャンで練習試合があったから、今日はその代休なんだ」

忠典の所属するサッカー部は、全国大会の出場経験こそないが、県内ではベスト8の常連校で、結構な数の練習試合をこなしている。

「別に用事も無いし、いいけど」

「それでさあ、俺、五十嵐のところに用事があって職員室へ行かなき

やなんないんだ。すぐに終わるから、ちょっと待っててくれよ」

「ああ、わかった。一人で待ってるのもヒマだし、一緒に行くよ」

用事はすぐに済んだが、ついて行ったただけの一真が捕まってしまった。

たつぷり一時間近い説教を聞くハメになったので、こんなことから外で待ってればよかったと後悔する。

やっと解放された二人が校舎を出ると、辺りにはボールを弾き返す小気味いい金属音が響いていた。

「悪かったな、俺のせいで遅くなっちゃって」

「まあ、いいさ。急ぐことでもないし」

二人は、野球部が練習するグラウンドの横を通って正門へと向かう。

「買い物って、何処行くんだ？…ってというか何買つつもり？」

連れだって歩きながら質問した正にその時。

「危ない!?!」

反射的に振り向いた一真の目は、一直線に向かってくる飛翔物体を捉える。

打ちそこないとはいえ、硬球が頭に当たればかすり傷では済まない。

（当たったら痛いだろうな。痛いのは嫌だな。）

0.1秒に満たないわずかな一瞬に、一真は驚くくらい冷静な自

分がいることを感じた。

(どっかへ飛んでけばいいのに)

そう思った時、二度あることの三度目が起こった。

真っ直ぐ自分の頭めがけて飛んでくるボールの縫い目まで見えた気がした瞬間、ボールは急角度でその進行方向を変えると、校舎と校舎の間にある中庭の方へと消えていく。

しゃがみ込んで避けようとした忠典が袖を掴んだので、二人はその場に尻餅をついて倒れた。

血相を変えた野球部員達が駆け寄ってくる。

3年生らしき一人が焦った口調で訊く。

「大丈夫か、怪我してないか」

「い、いえ、大丈夫です。どこにもぶつかってないみたいですから……」

念のため、頭や肩を触ってみたが、特に痛みを感じるところはなかった。

「そうか、それならよかった。急にボールが飛んでいく角度が変わったから、てつきり頭かどこかにぶつかったのかと思った」

ほっとした表情を浮かべた隣で、別の3年生が怒鳴り声を上げる。

「おい1年！ネットに隙間が開いてるじゃないか！」

グラウンドの外周には等間隔で支柱が立てられ、その間に張られたワイヤーにカーテン状のネットがつり下げられているが、その合わせ目に2メートルほどの隙間が生じていた。

「お前らがちゃんと閉めとかないから、こんな事になったんだぞ！」  
頂垂れる1年生達へ容赦ない叱責が飛ぶ。

何人かの部員が、ボールを探してこいと言われて中庭の方へ散っていった。

三年生数人に抱え起こされた二人は、謝罪の言葉を掛けられて、逆に恐縮しながらその場を離れる。

周りには騒ぎを聞きつけた十数人の生徒が集まってきていたが、何事もなかったことがわかると急に興味を失って立ち去っていく。

ただし、二人の例外を除いて。

「ねっ、お姉ちゃん。あの人だよ、昨日話したのは」

「可能性はありそうね。まだ確定ってわけじゃないけど」

その二人は、中庭の植え込みの陰から一部始終を見ていた。

一人は校内で一真にぶつかりそうになった、あの子だ。

小柄な体で精一杯背伸びをして、騒ぎの様子を見ようとしている。もう一人、『お姉ちゃん』と呼ばれた女子生徒は、対照的に170センチ近い長身に整った顔立ち、胸にかかった艶やかな黒髪を右手でかき上げる仕草が、どこことなく大人びて見える。実年齢よりも年上に見られるであろう外観に比べ、頭につけている、リボンをあしらった可愛いデザインの力チューシャが、ややアンバランスな印象を与える。

「私は間違いないと思うんだけどな。」

今日も校内で偶然のふりして接触してみたけど、ピンとくるものがあつたしね」

「でも、『共振』した訳じゃないんだ」

「うん……そこまでは感じとれなかったなー」  
「どっちにしても手順通り調査する必要があるわね。『香寿美さん』には私から言つとくから、『ストーカー』お願いね」  
「その言い方、やめて欲しいんだけど」  
「ほら、早くしないと彼、行つちやうよ。見失つたら大変」  
「はいはい、わかりました。じゃあ今日は遅くなるかもしれないから、先にご飯食べてね」

言い残して走り出そうとした『妹』を慌てて『姉』が呼び止める。

「あ、ちょっと、今日の晩ご飯ってどうしたらいいの？」

それまでの態度が一変し、ここから『姉妹』の立場が逆転した。

「昨日の内にビーフシチューを作っておいたからって、言ったでしよ？」

ちょっとあきれたような口調で答える。

「え？ああ、そうだった？」

「しっかりしてよ。キッチンに置いてあるから適当に温めて食べてよね。あと、ダイニングのテーブルにバゲットが置いてあるから」

「えー、パンなの？私、夜はごはんがいんだけどなー」

「もう、お姉ちゃんはいつもわがままなんだから。……んー、じゃあラップしたご飯が冷凍してあるから、レンジで解凍して。それぐらいお姉ちゃんでも出来るでしょ？」

「う、うん。多分……」

「わかんなくなったら電話して。出来る限りできるようにするから。」

そうそう、火の扱いには注意してよ、ウチのコンロはIHじゃないんだからさ」

まるで母親のような台詞を残して、長い髪を揺らしながら走っていく。

残された『姉』は、その後ろ姿を不安げな表情で見送っていたが、やがてくるりと向きを変えて歩き出そうとした。

その足下に、一真を襲った硬球が転がっていた。

立ち止まって、すっ、と右手をかざす。

ボールは地面を離れ、重力に逆らいながら吸い付くように右の手の平に収まる。

顔を上げると、きよるきよると辺りを見回しながらボールを探している、ユニホーム姿の1年生が目に入る。

握ったボールを頭上で左右に大きく振りながら、大声で呼びかけた。

「ねーえ、もしかしてこれ探してる？」

彼はこのときほど先輩に怒られたことを感謝したことはなかった。さつきは閉めたはずのネットが知らない間に開いていて理不尽に怒鳴られるし、そのあおりでボールを探しに行かされるし。

しかし、そのおかげでかわいい女の子との出会いが転がり込んできた。

しかも、あの子は確か……

「あ、サンキュー、助かったー。今、取りに行くから」

ニヤニヤしそうな顔を無理矢理引き締めながら走り出そうとしたが、それを押しとどめるような返事が返ってきた。

「来なくてもいいわよ、投げるから受け取ってね」

そんなことされたら、せっかくお近づきのチャンスがフイになるじゃないか、一瞬そう思ったが、多分、投げ損なって足下に叩きつけられるのがオチだろう。そうなってから受け取りにいつても遅くない。

そう考えておざなり構えたグラブに向かって、女の子にありがとう、ぎこちないフォームで投げられたボールは、しかし予想に反してストライクの返球で帰ってきた。

お互いの距離は30メートルは超えている。

驚いて思わずグラブに入ったボールを見るが、当然ながら何の変哲もない、ただのボールだ。

何はともあれ、もう一度礼を言おうと顔を上げたときには少女の姿はきれいさっぱり消えていた。

「あ、あれ？」

辺りを見回してみたが、結果は変わらない。

幻でも見ていたのか、首をかしげながら立ち尽くすしかなかった。



(5) 偶然

高校の最寄り駅から地下鉄に乗って15分余り、地上に上がると市内最大規模の電気街である社町通りが南北に走っている。

平日にも関わらず多くの買い物客で賑わう通りの中程、ビルの1階にあるファーストフード店は『コールドドリンク50円キャンペーン』の効果か、大学生らしきカップルや学校帰りに見える中高生グループなどでごった返していた。

最奥の席に陣取った男子高校生二人のテーブルには、アイスコーヒーとアイスティーのグラスだけ。

「一緒にポテトも…」と言いかけたアルバイト店員の言葉を、「注文は以上です」と、大仰なセリフできっぱりと遮り、出費を最小限度に抑えたのだった。

普段なら、この1杯で2時間は粘るのだが、今日はそんなに長居は出来ないだろう。

時刻はもうすぐ午後7時、担任教師の説教と硬球激突未遂事故のおかげで予定が狂ってしまった。

厳しい家庭という訳ではないが、さすがに9時10時まで遊び歩くわけにはいかない。

(30分くらいで出ないといけないな)

そんなことを考えながら、一真は手にしたガムシロップをアイスティーのグラスへ投入する。

しかも、当然のように3個立て続けに、だ。

あきれ顔で忠典が言う。

「……………本当にそれ、飲むのかよ?」

「悪いか？」

「それじゃ、砂糖水だろ」

「これくらいが丁度いいんだよ」

そう言いながら、一真は満足げにアイスティーを飲む。

見ているだけで胸焼けしそうになるので、なるべく一真の方へ視線を向けないようにしながら、テーブルの上に置かれた紙箱の開封に取りかかった。

中から取り出したのは、二人の首に装着されているモノと同じような形状をしている、機械と言うには華奢な道具。

しかし人々が思力技術の恩恵を受けるには、この道具の助けが必要不可欠だ。

『携行装着式思力増幅機』という、いかにも役人が付けそうな正式名称で呼ぶ者はまずいない。

いつの頃からか、『アンプ』という通称名が定着していた。

国民一人一人に中学入学のタイミングでアンプが無償で支給される。これはもれなく全員に、だ。

標準機と呼ばれる支給品は必要十分な機能を有するもので、これで一通りのことは不自由なくこなせる。

初期の頃に比べると小型軽量化が進み、今では装着していることをつい忘れてしまうくらい小さく、薄く、そして軽くなっている。

通常の社会生活を営む上では、この標準機で事足りるのだが、人には他人と差別化を図りたいという欲求がある。

需要に対して供給が為されるのは当然の結果だ。

今では、各メーカーから様々なアンプが発売され、一大マーケットを形成している。

実際の機能面でそれほど差があるわけではない。

もっとも重要な思力の増幅率については、体に与える影響など安

全性の面から制限が掛けられているので、どの機種も似たり寄つたりの性能だ。

それ以外の部分、主にデザイン面で差別化を図っている商品が多い。

耳に掛けるタイプや頭につけるカチューシャタイプ、小型化の流れに逆らって敢えて大きくしたヘッドフォンタイプもある。

標準機と同じ首の後ろから装着するタイプでも、色や表面処理を変えたりして消費者にアピールしている。

二人がしげしげと眺めているのは、マットブラックの表面処理が施された、標準機に似た首の後ろから装着するタイプだ。

「やっぱ、黒っていいよな。これにして正解だったな」

販売店の店頭で、たっぷり1時間は悩んだ末に選んだ機種を満足げに眺める。

今までは標準機で十分と考えていた一真だったが、考えがぐらつく。

「なんだか俺も新しいアンプ欲しくなってきたな」

「買っちゃえばいいじゃん」

「でも高いだろ？」

「俺みたいにバイトしたら？」

自宅近くのコンビニエンスストアでアルバイトしている忠典は、クラブの練習がない日は勿論のこと、練習がある日でも遅い時間に少しでも働いて、自力でアンプの購入資金を貯めたらしい。

そういうところは尊敬に値すると一真は素直に思っている。

(俺には真似できないな……)

クラブもバイトもしていない自分が、ひどく自堕落な人間に思えてきた。

.....

予定通り、約30分後にファーストフード店を出た二人は、他愛もない会話を続けながら地下鉄の駅を目指して歩き始めた。

「あれ、蓮見さん？」

すれ違いざまに忠典が声をかけた相手は、セーラー服姿の女の子だった。

飾り気のないセミロングの黒髪と、セルフフレームの眼鏡が真面目な印象を与える。

「え、あ、生野君」

明らかにとまどいを隠せない様子で返事をした少女は、いきなり声を掛けられて、むしろ迷惑がっているようにも見える。

「久しぶりじゃん。あ、そうだ、蓮見さん、連絡いつてる？クラス会の」

「あ、はい、一応聞いてます」

「夏休みに入ってからだから、時間あるよね？」

「でも、補習とか、いろいろ忙しいから……」

「そっかー。残念だなー」

そう言った忠典は、ようやく隣に一真がいることを思い出した。

「あ、そうそう、こいつ三咲っていうんだ。高校の同級生。こっち  
蓮見素子さん。中学の時の同級生」

「どうも…」

こんなときはどう言えばいいんだろう。

如才ない友人と違い、どちらかという人見知りをするタイプの  
一真は、いきなり女の子に紹介されて、とまどいを隠せない。

当たり前障りのない言葉で場を濁す。

相手もどうやら同じタイプの子のようだった。

極力うつむいたまま目を合わせないようにしていたが、仕方が無  
く、といった感じで顔を上げる。

二人の目が合った、その瞬間。

素子という女の子の様子が明らかに一変した。

一瞬、驚いたような表情を浮かべた後、今度は一真の目を真っ直  
ぐに見つめ返してきた。

人見知りどころではない。

愛の告白でもしそうなくらい真剣な眼差しを送ってくる。

だが、黒眼がちな瞳には、愛とか恋とかそんなものとは全く違つ、  
何か切実に訴えかけてくるような雰囲気を感じられた。

場の空気に耐えられなくなったのは、蚊帳の外の忠典だった。

「え？何？二人、知り合い？」

その言葉に、我に返った様子の素子は、

「……わ、私、用事があるので、これで…」

質問には答えず逃げるように立ち去り、一つ目の角を曲がって二人の視界から消えた。

「三咲、お前、蓮見さんのこと知ってるのか？」

同じ質問をされて、今度は一真がふと我に返る。

「え、なんで？全然知らないけど」

「そうか？向こうは何だか知ってるような感じだったけど」

「そんなわけねえよ。あの制服、洛央だろ？秀才学校と俺にどんな接点があるんだよ」

「ああ、まあ言われてみればそうだな」

『洛央』と呼ばれる県立洛央高校は、県下では、というより国内でも有数の進学校として知られている。

最難関の国立大学である西都大の合格者数ランキングでは、公立校ながら毎年全国でも十指に入るほどだ。

洛央に行けるような頭のいい知人に心当たりはないし、一真の出身中学からは一人も入学していないはずだ。

ただ、確かに素子の様子は普通じゃなかった。

(俺に何か言いたそうな感じだったけど…)

だが、考えてみたところで答えが出るはずもない。

なんとなく後ろ髪を引かれる思いだったが、時間という現実と帰宅を急ぐ人の流れに促されるようにして、二人はまた駅へ向けて歩き出す。

しかし、その背中に向けられた視線には気が付いていない。

視線の主である素子は、ビルの出入り口に隠れながら様子を窺っていた。

二人が歩き始めると一度は躊躇したが、それも一瞬の事。

胸に当てた右手をぎゅっと握りしめ、意を決したかのようにビルの敷地から歩道へ出ると、一定の距離を保ちながら二人の後を追いかけて始めた。

(6) 必然

「蓮見さんはさ、中3の時に不登校になつてさ」

駅への道中、聞いてもいないのに忠典の昔語りが始まった。

「普通に考えたらいじめが原因だろうってことで、学校も調査したんだけど、それらしいことは全くなかつたんだ。確かに内気で誰とでもうち解けて仲良くなれるっていうタイプじゃないけど、かといつて友達がいなかった訳じゃないし。もちろん、クラスの俺たちにも身に覚えがなかつた。結局、原因はわからずじまい」

話を聞きながら、一真はさつき別れたばかりの少女の顔を思い浮かべたが、社交的とは言い難い印象を受けたことは確かだ。

真面目で頭がいい秀才、だけれども人付き合いは苦手、一真の感じた第一印象はそんなところだった。

「3年生の1年間で登校したのは、トータル1ヶ月もなかつたんじゃないかな？クラスメイトの中には、蓮見さんのことを良く憶えていない奴もいると思う。俺は2年のとき一緒のクラスだったから良く知ってるんだけど」

中学の時、一真のクラスにも不登校の女の子がいた。

顔を思い浮かべようとしたが、名前すら思い出せないことに愕然とする。

「ただ、学校に来ていなくても頭は抜群に良かったんだな、これが。洛央にはトップの成績で入学したって噂だし。あそこ、入学試験の



点数を重視するだろ？」

受験しようとも思わなかった高校の入試システムのことは知らないが、真面目で頭がいいという第一印象は間違っていないかったことになる。

「でも、あの様子だと高校にはちゃんと行けてるみたいだな。中学のときも2年生までは普通に通学してたし、美術クラブではサブリーダーも努めてたくらいだから、もともとやれば出来る子なんだよな」

上から目線で一人納得している友人は無視して、もう一度素子の顔を思い浮かべてみる。

いや、思い浮かべるまでもなく、何かを伝えようとしていた真剣な眼差しが頭から離れないのだ。

吸い込まれそうな瞳、という表現があるが、素子の場合は逆に自分の中へ入ってきそうな眼だった。

いつになく真剣な面持ちでそんなことを考えている間に、相方の話題は全然違うところへ向かっていった。

「そっぴや、お前、何でクラブ入らないんだ？中学でバスケやってたんだろ？」

急に矛先が自分に向いてきたので、少し動揺しながら、素子のことはひとまず頭の脇に置くことにした。

「別に好きでやってたわけじゃなかったからな。中学では全員クラブに入らなきゃいけないかったから入部しただけで」

「もったいないよなー、お前、運動神経はいいのにな。他のクラブは考えなかったのか？」

「高校のクラブなんて、ほぼ100パーセント経験者ばかりだろ？その中で今更、1からやるのもなー」

「文化系は？」

「うーん、今ひとつピンと来ないんだよなあ。自分のやりたい事、つてのがわかんないし」

今ひとつ煮え切らない態度の友人に、あきらめ顔でため息を漏らす。

「お前つて、ホント、3Mそのものだよな」

「なんだっけ、それ？」

「先週のホームルームで五十嵐が言ってただろ？無気力、無関心、無感動。『現代若者気質』とか何とか…」

「そういえば、聞いたことがあるような、無いような…」

「早いこと何か見つけないと、高校3年間なんて、あっという間に終わっちゃうぜ」

珍しく正論を吐く。

(わかってるさ、そんなこと)

それだけに余計に焦りが募る悪循環に陥っているのも、重々承知している。

一真が答えなかったことから、しばし無言で歩いていたが、渡ろうとした交差点の歩行者用信号が赤になり、二人は立ち止まった。

続いて自動車の信号が黄色から赤に変わり、青い矢印信号が点灯した。

右折レーンの先頭にいたセダンがわずかに前進したとき、対向車線を猛スピードで走ってきたステーションワゴンが信号を無視して交差点内に直進で進入する。

速度は100キロを超えていた。

相手が止まるだろうという思いこみは、安全運転の大敵だ。

双方の運転手はその過ちを犯したとき、2台の車の右フロント同士が軽く接触する。

接触自体は擦った程度だったが、それをきつかけとしてステーションワゴンのタイヤはグリップを失い、スピン状態で制御不能になる。

自動車にも勿論、思力制御技術が使われているが、それはあくまでもサブであり、ハンドルとアクセル、ブレーキを操作するのは運転者自身だ。

歩行者の急な飛び出しに対応するブレーキなどは思力により作動するようになってはいるが、時速100キロでスピンした状態で急ブレーキをかけたとしても、車体の制御を取り戻すことはできない。

回転しながら進むその先には、信号待ちの歩行者達。

突進してくる凶器に、皆は慌てふためいて背を向けて逃げようとしたり、後ろへ倒れ込んだりした。

だが、一真の反応は対照的だった。

正面を向いたまま両手を真っ直ぐ前に伸ばして、向かってくる車を掴み取るうという格好だった。

そう、突っ込んでくるのが1.5トンの鉄の塊ではなく、プラスチックで出来たミニチュアカーでもあるかのように。

その時、運転手の硬直した表情が見えた気がした。

学校の時と同じだ。

あの時も飛んでくるボールの縫い目まで見えたような気がした。

いや、確かに見えたのだ。

スローモーションのように。

一真の2メートル程前でタイヤが路面を離れ、車はジャンプ台に乗ったかのように斜め上方へと飛び出す。

頭上約1メートルの高さを通過した車は、着地点としてはおあつらえ向きの植え込みへすつぱりと収まった。ツツジの枝がクッションとなって、着地の衝撃を和らげたので、車体は目立った損傷は受けなかった。

頭の上を飛んでいく車に合わせて、一真は意図的に後ろへと体を倒し、最後は仰向けに寝ころんだ姿勢で着地までを見届けていた。端から見れば、周りの者と同じように尻餅をついて倒れ込んだように見えただろう。

だが、わかつていた。

学校の件では自信がなかったが、今回ははっきりと自覚していた。

今のは、自分がやったことだ、と。

両手の平には、硬い金属を掴んだ感触が残っている。実際にはあり得ないことだ。

しかし、その感触は間違いなく現実のものだった。

（そういえば、体育の授業でやった柔道の巴投げって、こんな感じだったな）

一真は改めて冷静な自分に驚く。

周りからは、救急車とか警察といった単語の断片が聞こえてきた。何人かの大人が駆け寄ってきて、早口で「大丈夫か」とか「怪我はないか」とか言ってきたので、大丈夫ですと答えていると、ふと何かに気が付いた。

集まってきた人々とは違う、別の視線、しかも一つではない。

辺りを見渡すが、人だかりが邪魔をする。

「三咲！無事か！」

半ば腰が抜けたように四つんばいで近寄ってきた忠典が、一真の腕に取りすがる。

適当に返事をして、腕をふりほどいて立ち上がったが、周りに見えるのは野次馬だけだ。

立ち尽くす一真の耳に、遠くから複数のサイレンの音が聞こえてきた。

## (7) 彼女の事情

口から生まれてきたような忠告が、身をもって体験した事件を言い触らさない訳がない。

実際には二人の運転手に怪我はなかったし、巻き添えになった通行人もいなかったたので、あれだけの大騒ぎとなったにもかかわらず、結果的には単なる物損事故の一つとして処理されることになるのだらう。

だが、広報担当よろしく、あること無いこと織り交ぜて学校中でしゃべりまくっていたことから、単なる事故があたかも重大事件のように誇張されて広まっていった。

そして昼休みのころには、一真が当事者の一人として、危うく巻き添えになるところだったことも知れ渡っていた。

休み時間に散々話をさせられたので、放課後はみんなに捕まる前に学校から姿を消そうと一真は心に誓っていた。

一人の時間が欲しかったのだ。

あの後、現場での実況見分に立ち会い、所轄の警察署へ行って事情聴取を受け、迎えにきた母親の車で家に帰ったのは午後11時を回っていた。

昨日の夜は興奮していたのでそこまでの余裕がなかったが、一晩寝て落ち着きを取り戻すと、脳が考え事をしたがっていた。

逃げるように正門から外へ出ると、一目散に走り出す。

目的地は学校からほど近い丸山公園の中にある、小高い丘。

その頂上付近に、一カ所だけ木々の切れ目があり、眼下に広がるパノラマを望む事が出来る場所があった。

考え事をするときは……否、『ぼーっとしたいとき』にはいつもここへ来る。

地面に寝ころんで空を見たり、遠くに見える山々を眺めていると、

心が和む。

しかし、今日はとてもそんな気分にはなれず、それこそ一年分くらいのお考え事をする覚悟でやってきた。

定位置に寝ころんでいつものように空を眺めてみたが、案の定、心の中は様々な思いが渦巻いて、リラックスとはほど遠い精神状態に陥る。

気持ちを落ち着かせるように深呼吸をする。

そうして昨日のことを思い返してみる。

そう、一真は向かってくる車を前にしてパニックになることもなく、冷静に対処方法を考え、それを実行した。

『時速100キロの車を手で止めて、誰にもぶつからないように掴み上げて』

後ろの植え込みへ下ろす』

確かにあの瞬間、一真はそう考え、実際に行動したのだ。

何故あの時、『自分には出来る』と考えたのか、その確信がどこから来たのか。

そして、その行動を可能にした得体の知れない力。

考え始めると、自分が何かとてつもない化け物になってしまいそうなの、そんな不安感が襲ってくる。

混乱に拍車を掛ける要因があった。

体を起こして辺りを見回すと、数メートル先に落ちている、こぶし大の石が目に入る。

右手をその石に向けて、心の中で（動け！）と念じてみる。

しかし、石はピクリとも動かない。

昨日から色々な物を相手に試してみたが、結果は同じだ。

考えれば考える程、混乱の度合いは深まっていく。

本当の事は警察にも、友人にも、両親にすら一切話していなかった。

た。

こんな事を話してもまともに取り合ってくれないし、笑われるのがオチだという思いはあるにはあったが、それ以上に何か本能的に言うてはいけないことのような気がしていたのだ。

もう一度寝ころぶと、もやもやとしてすつきりしない胸の内とは対照的に、雲一つ無い青空が目まぶしく映る。

一つ、ため息をついたその時。

「三咲君」

「うわあっ!」

誰もいないと思っていた後方からの不意打ちに、文字通り飛び上がって驚いた。

「う、ごめんなさい。驚かすつもりは無かったんだけど…」

首を後ろへ巡らせると、そこにはクラシカルなデザインのセーラー服に身を包んだ少女が立っていた。

手にした鞆の持ち手を意味もなくモジモジといじりながら、眼鏡のレンズ越しに見える目が泳いでいる。

この子は、昨日の……

「あ、えっと、蓮見さん、だったよね」

立ち上がりながらそう言った途端に、少女の顔がぱっと明るくなった。

「うれしい!おぼえてくれたんですね。蓮見素子です」

そう、昨日、忠典と町を歩いていて、偶然すれ違ったあの子だ。



人の名前を覚えるのが苦手な一真にしては珍しく、素子の名前は覚えていた。

昨日の今日なので、当然といえば当然だが…。

「あの、えっと、帰る途中？」

何故自分に声をかけてきたのか、その真意がわからないまま、一真は初対面の時と同じく、当たり障りのない会話で場をつなごうとした。

「え？あ、はい」

しどろもどろになりながら返ってきた答えに、一真は疑問符をつける。

素子が通う洛央高校は一条学園よりも北にある。

そして忠典と同じ中学と言うことは、学区からいくと洛央高校よりも更に北に自宅があるはず。

しかし、現在二人がいる丸山公園は、一条学園の南東に位置しており、素子の帰宅ルートからは反対方向のはずだ。

首をかしげる一真を見て、素子はしばらく逡巡しているようだったが、決心を付けたかのように話し出した。

「実は…学校からここまで、三咲君の後をつけてきたんです」

「え、な、何で？」

その問いには答えずに、素子は逆に質問した。

「最近、三咲君の周りで変わった事が起こってませんか？信じられない事を体験したとか？」

その言葉に心臓を貫かれたかのような衝撃を受けた。

(この子、まさか知ってるのか?)

答えをためらう一真。

「……間違ってたらごめんなさい。でも……」

一瞬の沈黙。

そして素子の表情が一変する。

一真は背筋を冷たい物が走ったような気がした。

「間違ってたなんか……ないわよね。そうでしょ?三咲くん」

漆黒の双眸が真っ直ぐ一真の瞳を見つめる。

すべてを見通すような視線。

別人と聞き間違えるような落ち着き払った声。

さっきまでのおどおどした、自信なさげな態度の少女と同一人物とは思えない。

一真は頭の奥の方を探られるような、何とも言いようがない感覚に襲われていた。

射すくめられたように体が動かない一真に対して、素子は言葉を続ける。

「昨日、初めて会ったときに直感でわかった。『私と同じだ』って

「同じ……」

「そう。『力』を持つ者同士、心が共鳴したの」

昨日までに聞いていたら『大丈夫か、この子』と思うであろう言葉だが、今となっては素直に頭の中に染みこんでくる。

「力って……」

「あなたの力は昨日、見させてもらった。走ってくる車を易々と掴み上げてしまう力」

(あの時、この子も現場にいたのか)

一真は昨日の事故直後に感じた視線のことを思い出していた。

「私の力は他人の心を読むこと。実は、あなたの心の内を読ませてもらったの、たった今」

「……………」

「初めて会った時にわかっていたけれど。あなたがどういう人間なのか、ちゃんと知っておきたかったから」

さっき感じた、違和感はこれだったのか。

一真はゴクリと唾を飲み込んだ。

「でもよかった、あなたが第一印象通りの人で。裏表のない、素直な人。安心して私のことを話すことができる」

そう言うと素子はゆっくりと両目を閉じる。

その表情には安堵の様子が見受けられた。

「ご、ご免なさい。偉そうなことを言ってしまった……。あの、気を悪くしたら謝ります」

次に目を開けたときには、元の、おどおどした態度へと逆戻りしてしまっただようだ。

ほっとした気分になった一真は、大きく息を吐き出した。

「心の中って、出来ればあまり読まれない方がいいな。何だか、こ  
う、息が詰まりそうになるっていうか…」

「実を言つと、私もあまり使いたくないんです、自分の力を」

うつむいた素子は、どこか淋しそうに見えた。

「この力が原因でつらい思いをしてきたから」

「つらい思い？それって、もしかしたら中学の時の…」

そこまで口にして、しまったと思った。

はっ、と顔を上げた素子と視線が合う。

「…生野君に聞いたんですね」

「あ、いや、その…ごめん…」

思い出したくない過去を呼び覚ますかも知れないきっかけを作っ  
てしまったと、一真は少し後悔した。

素子はしばらく黙っていたが、何かを吹っ切るかのように首を左  
右に振りながら言った。

「ううん、いいんです、本当のことだし。いつかわかることだから」

そこから素子は自分の過去を語り始めた。

「私がこの力を使えるようになったのは、中学2年生の3学期が始  
まったところからでした。突然、人の考えていることがわかるよう  
になったんです。人の考えが私の頭の中へなだれ込んできたんです。  
いい思いだけじゃない、嫉妬や怒り、欲望や悲しみが際限なく入っ  
てきました」

素子の目が少しだけ曇りを帯びたように見えた。

「人の考えがわかってしまうと、人を信じられなくなってしまった。上辺だけの付き合いというものもわかってしまった。人と接するのが怖くなって、それ以来、心を閉ざしてできるだけ力を使わないようにして、部屋に閉じこもるしかなかったんです。自分を守るために……」

うつむいた素子の表情は良く見えなかったが、小さな肩が震えているように見えた。

「苦しかった。誰にも相談することが出来ずに、悩みを心の内にため込むしかなくて……」

顔を上げた素子は、うつすらと涙を浮かべた目で見つめ返してくる。

「でも、諦めないでよかった。こうして全てを打ち明けられる人に出会えたから」

「いや、俺なんかでよければいくらでも話を聞くけど……」

今まで人からこんなに頼られたことは無かったので、なんだか照れくさくなってきた一真は、照れ隠しに話をそらす。

「そういえば蓮見さんは他の力は使えるの？例えば物を動かすとか」  
「私の場合、あんまり得意じゃないんだけど……」

と言いながら素子が右手を差し伸べると、さっきはビクともしなかった石が軽々と宙に浮かぶ。

「これぐらいは出来るんです。だけど、もっと巧く力を使う人もいるの」

「もっと、ってことは、他にも同じような力を持つてる人がいるの？」

一真の問いかけに、素子は真剣な表情で答えた。

「実は先週のことなんだけど、ある女の人から突然声を掛けられて、『あなたのような力を持っている人を探しているの』って。その人もその場で力を使って見せてくれたんだけど、それこそ三咲君みたいに車を持ち上げるとか……」

「でも、それくらいだったら手品とかでやれないこともないんじゃない？」

「そうなんだけど……でも、何となくわかるんです。同じ力を持っている者同士しかわからない感覚というか……言葉では説明しづらいんだけど。三咲君ともそうなんだけど共鳴しあうというか……」

そこで言葉を切ると、次の言葉を言おうか言うまいか迷っている様子だった。

見かねた一真に「それで？」と促され、素子は言葉を続ける。

「実は今日、これからもう一度その人と会うことになっているんだけど、一人では不安で……出来たら三咲君にも一緒に来てほしいなって。それで思い切って声をかけさせてもらったんですけど……」

うつむき加減の素子は、少し首をかしげながら上目遣いに一真の顔をのぞき込む。

「だめ……ですか？」

そんな仕草で男に頼み事をするのは反則だろう。

( 8 ) 勧誘・誘惑

待ち合わせの場所は、オフィス街の外れにある喫茶店だった。

一真と素子が店内に入った時、約束の時間まであと15分ほどあったが、すでに目当ての女性は一番奥の席に座っていた。

二人の姿に気が付くと、立ち上がってにこやかに手を振る。

「すみません、お待たせしてしまって」

素子が軽く会釈をする。

一真もつられて頭を下げた。

「いいのよ、私も今、来たところだから」

そう言いながら、視線を一真へと向ける。

「この子ね、電話で話していたもう一人っていうのは」

「あ、ども。三咲っていいいます。三咲一真。蓮見さんと高校は違うんですけど、学年は同じ1年生です」

「よろしく。進藤瑠美よ」

決してスタイルが悪いわけではないし、顔だって十分美人の部類に入っている。

しかし、『モデル並の』とか『女優のような』といった形容詞は、なんとなくそぐわない。下世話な表現を使うならば、『男好きのする』とでも言えばよいのだろうか。

そんな言葉を知る由もない一真の受けた第一印象は、



(なんか、この人、エロいなー)

という身も蓋もないものだったが、案外、15歳男子高校生の素直な感想が当を得ているのかも知れない。

ショートパンツから伸びる太ももの付け根まで見えそうな足や、深く開いた胸元から覗く谷間だけでなく、全体が醸し出す雰囲気がある。そのような印象を与えるのだろう。

素子から聞いた話では年齢は20歳前だというが、実際に会ってみると、もっと年上の大人の女性に見える。

いずれにせよ、健全な男子のリビドーを刺激する存在であることは間違いないようだ。

「じゃあ、座って話をしましょうか」

瑠美は二人に席を勧めると、自分も椅子に腰掛けて、ナチュラルピンクのルージユを引いた、やや厚めの唇を開いて話を始めた。

「蓮見さんは繰り返しになってしまっけど、彼の為に最初から順番に話をしていくわね」

もう一度視線を一真の方へ向ける。

「私はある組織に所属しているんだけど、その組織はね、仲間を探しているの。君達のような力を持った仲間を」

予め素子から聞いてはいたが、実際に自分が言われてみると、何と反応したらいいのかわからなくなってしまう。

「正直言って、胡散臭い話だと思ってるでしょ? 『組織』とか、映画や小説じゃあるまいし」

「え、いや、そんなことは……」

「いいのよ、いきなりこんな話を聞かされたら、誰だってそう思うでしょうね。例えば……」

右手の人差し指を立てると、アイスコーヒーのグラスから氷が一つ、空中に飛び出した。

指をクルクルと回すとグラスの上で氷が円を描き、指を下げるとカランという音と共にグラス内に戻った。

「こんなことをしても、手品としか思ってもらえないしね。こればかりは『信じて』としか言いようがない。でも……」

瑠美は素子の顔へと視線を移す。

「力を持つ者同士だったら、すぐにわかってもらえる。共鳴することと同じ仲間なんだと認識出来るから」

その言葉に素子が無言のまま頷く。  
それを横目で見ながら、一真は言った。

「信じます。蓮見さんもあなたと同じことを言っていたから」  
「ありがとう。そうよね、彼女の言葉は信じてあげないかね」

笑みを浮かべながら二人を見比べる瑠美。

「え、あ、いや、そんなんじゃない……」

『彼女』という言葉に反応して、しどろもどろになる一真の横で、素子は顔を赤らめながらうつむいてしまった。

「じゃあ、信用してもらえたとして話を続けるわね。何故仲間を探しているのか、ということだけど……」

そこで瑠美は一旦言葉を切った。

隣の席に4人連れのサラリーマンが座り、なにやら書類を取り出して仕事の話始める。

急に客が増えてきた店内は、複数の会話が入り交じって一気に騒がしくなった。

「君達、これから時間あるかしら」

隣のサラリーマン達に聞こえないよう、声のトーンを2段階ほど下げた。

「込み入った話になるから、場所を変えたいんだけど、いいかな？」

「俺はかまわないけど……」

素子も無言でうなずく。

それを見て、瑠美は立ち上がりながら言った。

「じゃあ、決まりね。そんなに時間はかからないわ、車で行けばすぐだから」

.....

瑠美の言うとおり、目的地は車で10分もかからない場所にあった。

20階建オフィスビルの地下駐車場へ車を入れると、瑠美は二人を促してエレベーターに乗り、12階まで上がる。

エレベーターから降りると、長い廊下が続いていた。

目指す場所は、その廊下の中間地点付近、出入り口の脇の壁面にはアルファベットで何か書かれた金属プレートが取り付けられていた。

瑠美に続いて中へ入った一真は、何とも言えない違和感を感じた。室内には、端末が組み込まれたデスクが20ほど整然と並んでいるなど、オフィスの体は為しているが、しかし人が誰もいないのである。

「遠慮せずに入ってね」

二人が通されたのは、オフィスの奥にある個室だった。

窓際に木製の立派なデスクが鎮座し、部屋の中央付近には高級そうな応接セットが置かれている。

社長室、といったところか。

瑠美は、革張りのいかにも座り心地が良さそうなソファを指し示しながら、

「どうぞ、座って。今、飲み物を持ってくるから」

そう言うと、一旦部屋を出て行く。

3人がけのソファに並んで腰を下ろすと、革が擦れる微かな音と共に体が沈み込んでいく。

予想外に座面が沈み込んだせいで、意に反して、背もたれに体を預けてふんぞり返ったような姿勢になってしまった。

一真が慌てて体を起こすと、アイスコーヒーのグラスを乗せたトレイを持った瑠美が戻ってきた。

テーブルに人数分のグラスを並べ、自分は一真と向かい合う位置

の1人用ソファに座り話を再開した。

「どこまで話したかな……そうそう、何故仲間を探しているのか、つとところからね。私達の組織は私達の力を色々なことに利用できないか、調査・研究しているのだけれど、どうしても数多くのサンプルが必要になるわけ。それで協力してくれる人達を探している、ということなの」

「色々なことって……」

一真が質問しかけたとき、ドアが開いて男が無遠慮に入ってきた。

「やあ、少年少女諸君。僕らの秘密基地へようこそ。楽しんでるかい？」

芝居がかった大げさな態度と言葉が、逆に軽薄な印象を与えてしまっているようだ。

長身瘦躯のその男は、染めたり脱色したようには見えない見事な金髪をかき上げながら、自己紹介を始めた。

「僕は黒津圭次。こつちのお姉さんと一緒に、君達のような人を探す仕事をしているんだ。もちろん、僕も君達と同じ力を持つ者の一員や」

黒津は空いているソファには座らずに、瑠美の右側の肘掛けに尻を乗せると、長い足を組んだ。

「で、どこまで話したんだい？」

「何故、仲間を探しているのか、というところまで」

「そりゃもちろん、社会正義の実現と世界平和への貢献の為さ」

瑠美は、真面目な顔で言い放つ黒津を無視した。

「組織の目的とか、詳しいことについては申し訳ないけれど今の時点では話せないの。君達を信用しない訳じゃないけれど、正式に私達の仲間になってももらえるまでは伝えることができない決まりだから、理解して欲しい」

その代わりに、と言いながら瑠美が話を続ける。

「仲間になってももらえたら、当然、君達にもメリットがあるわ。一つは情報。研究結果から君達の疑問に対して、回答を提供することができる。差し当たって一番知りたいのは、何でこんな力が使えるのか、ということじゃない？」

「それはそうですね……」

「残念ながら、完全な回答ができるほど力のメカニズムが解明されている訳じゃないけれど、ある程度のことは教えることが出来ると思う。」

それに、経済的なメリット、平たく言えばお金ね。君達はまだ高校生だから、アルバイト扱いつてことになるけど、相応の給与が支給されることになる。実際には謝礼金扱いで支出するんだけど……あつ、こんな内々のことを聞いてもわからないわね、ごめんなさい」「あの、質問してもいいですか？」

それまで黙って話を聞いていた素子が口を開いた。

「どうぞ、何でも聞いて」

「給与とかアルバイトってことは、その、組織ってというのは、会社みたいなものなんですか？」

それを聞いて瑠美と黒津は顔を見合わせ、意味ありげな笑いを浮

かべた。

「いい質問ね。これも詳しくは話せない事なんだけど……公の機関、  
ってことだけは言っておくわ」

「公の機関って、それじゃあ公務員ってこと？」

驚きを含んだ一真の疑問に、黒津が答えた。

「信じられないかもしれないけどね、こんななりしてるからさ。で  
も子供の頃教わらなかったかな？人は見かけで判断しちゃダメだっ  
て」

一真と素子は、お互い、信じられないといった表情を浮かべなが  
ら顔を見合わせた。

「これで話ほだいたい終わったわね」

瑠美が話をまとめにかかる。

「今すぐに返事が欲しいとは言わないけど、そんなに長く待てない  
事情もあるの」

「そう、僕らには上司という怖い存在がいてね。まだかまだかとう  
るさいんだよ。まあ、君らには関係ないことかも知れないけどね、  
お兄さん達を助けると思って、一つよろしく頼むよ」

「それは冗談として、ダメならダメで新たな人を探さなきゃならな  
いし……じゃあ、期限は一週間後でいいかしら。それよりも前に決  
心が付いたら、いつでも連絡してもらって構わないから」

「はい、わかりました」

二人が揃って返事をする。

気が付けば窓の外は闇に包まれていた。

「ご免なさいね、長時間引き留めちゃって」

瑠美のその言葉を機に、4人は誰からともなく立ち上がった。オフィスの中を通り抜け、出入り口まで来たところで瑠美は、変わらない笑みのまま二人に言った。

「じゃあ、気を付けて。いい返事を期待してるわ」

軽く頭を下げて外へ出ようとした一真は、立ち止まって瑠美の方を振り返る。

「最後に一つ聞いてもいいですか？」

「いいわよ」

「俺、本当に力を持つてるんでしょうか？」

うーんと言いながら瑠美は腕組みをして少し考えていたが、

「これは私の全くの想像でしかないんだけど」

と前置きして答えた。

「君の場合、危機的状況に陥らないと力が発揮されないということ  
は、それは外的要因によって引き起こされている、ということよね。  
それならあとは君の内的要因が満たされれば、いつでも力を使える  
ようになるんじゃないかな」

そう言って素子の方を見た。



「大丈夫よ。彼女が間違いないって言うてるんだから、その言葉を信じてあげたら？」

(9) 衝突

一直達がいた部屋の窓からは、道路を隔てた向かい側にある、生命保険会社の社名を冠したビルが見えていた。

同じく20階建てのそのビルの、手すりやフェンスのない屋上から下を覗くと、高所恐怖症でなくとも足がすくむ。

そんなビルの端に、その少女は腰掛けていた。

バランスを崩せば、100メートル下のアスファルトヘダイビングしかなない状況にありながら、鼻歌交じりに体はリズムを取っている。

時折吹く風が、頭の左右で栗色の髪をなびかせていた。

「ん？電話？」

視界の右下に着信中のメッセージ。

その下には、

お姉ちゃん

の表示。

少女は、聞いていたアイドルグループの新曲を一時停止して、電話に出た。

「何？お姉ちゃん。電話なんかしてきて」

『いや別に用事はないんだけど、どんな様子かなーと思ってさ』

「今はねー、四條通りのオフィス街にある例のビルの前にいるんだけど、中に入ったつきり出てこないんだよね」

『もう一人の女の子のことは何かわかった？』

「お姉ちゃんと同じ年くらいで、洛央の制服ってことはわかったん

「ただど……」

端から見れば、独り言を言っているようにしか見えないかもしれない。

この時代、電話といえば思力ネットワークを介した個対個の通信手段を指す。

アンプを身に付けていれば、基本的に何処でもネットワークにアクセスできるので、電話機というものは必要なくなっている。

結果、町中至る所で独り言をつぶやいているような光景に出くわすが、99.9パーセントは、この少女と同じく、電話中の人々だ。年配者にとっては、この『独り言スタイル』の電話は抵抗があるらしいが、若い世代、特に物心ついたとき既に思力技術が広く普及していた20代から下の年代にとっては、至極当たり前のこととして受け止められている。

もちろん、ネットワークに乗せて行き交うのは音声だけではない。データ通信についても、思力ネットワークが主流となって久しい。20年前、情報通信分野における主導権争いに敗れ、諸外国の後塵を拝していたところへ降ってわいたように登場した思力技術。

当時の政府は、インフラ整備など思力技術普及策を積極的に推進し、その核として思力ネットワークの構築に力を入れた。

その結果、誰でも何処でも簡単にアクセスできる利便性の高さから、当時普及しつつあった携帯電話やインターネットを駆逐し、一躍主役の座に躍り出た。

今や思力ネットワークは世界中に広がり、情報通信網のスタンダードとなっている。

少女が聞いていたのも、ネットワーク経由でストリーミング再生した曲であるし、身近な例では、視界の端に表示されている時刻もネットからのデータに基づくものだ。

姉妹の会話も、思力ネットワークにより成立している。

『そうか、わかった。』ラボ』はその女の子に眼をつけてたのね。そして二人は昨日、偶然出会ってしまった訳ね。このままだと二人とも取られちゃう危険性があるわね、困ったなー』

電話の向こうから聞こえる声は、言葉とは裏腹にあまり困った様子を感じられない。

「もうかれこれ1時間になるかな、ビルに入ってから」

『四條通りのビルって、確か…』

「うん、『ラボ』の別室があるんだよね、『非公然』だから確か会社の名前になつてたはずだけど……えーとM&Aじゃない、T&Tでもない……」

うーん、と唸りながら人差し指を額につけて思い出そうとする。

「T&Eコーポレーション」

「あつ、そうそう、それぞれ……って、誰!？」

背後から聞こえてきた三人目の声に、思わず少女は振り返る。

「あんだ、こんなところで何こそそやってんの?目障りなんだけど」

金色に近い茶髪をポニーテールにした少女が、腕組みをしながら切れ長の目で睨みつけていた。

着崩した制服が妙に似合っている。

「ああ、なんだ。はづきちゃんか」

気の抜けた言葉に、はづきと呼ばれた少女は、あからさまに不機

嫌な表情になる。

「あんに馴れ馴れしく『ちゃん』付けで呼ばれる筋合いはないわ」「いいじゃん、別に。それに、こそこそしてるわけじゃないんだから。仕事よシ・ゴ・ト」

軽くウインクして答えたその態度によって、不機嫌さは更に増したようだった。

「ふーん、あんたがそんなに仕事熱心とは知らなかった。私も見習わなきゃね」

そう言った刹那。

右足が地を蹴る、その一挙動でおよそ10メートルの間合いを一瞬で詰める。

勢いを乗せて突き出された拳は、しかし標的を捉えることなく空を切った。

一連の動作は、常人はもとより、短距離のオリンピック金メダリストでもボクシングの世界チャンピオンでも到底実現不可能な人間離れたスピードであるにもかかわらず、小柄な少女の体は片足を軸にしてクルリと一回転し、襲いかかる拳を紙一重でかわす。

次の瞬間、今度は両足にため込んだ力を一気に解放し、まるでバレエを見ているような錯覚に陥るくらい華麗な身のこなしで空高く跳躍した。

突き出した状態のまま右へ薙ぎ払った拳が再び空を切る。

真上に上がったものは、そのまま真下に落ちてくるのが道理。

しかし、少女の体は空中で運動方向を水平へと変え、相手の背後に着地した。

間をおかずに再び地を蹴って、今度は横方向へと跳ぶ。

回し蹴り気味に繰り出された足は、またしても空振りに終わる。

攻守ともに人間業では無いスピードと、そして物理の法則に反した体の動き。

二人の少女の可憐な外観からは想像できない世界が繰り広げられている。

「この、ちょこまかと逃げ回って」

いらついた様子で、言葉を吐き捨てる。

「だって、はづきちゃんと違って腕に自信ないんだもん」

「だから名前で呼ぶなど、何度言えば！」

振り下ろした右手には、いつのまにか長さ1メートルあまりの細長い物体が握られていた。

その形状はまさしく刀。

日が落ち、闇がその支配領域を拡大していく中、それは白く淡い光を放っていた。

「お姉ちゃん、どうしよう。はづきちゃん、本気だよー」

電話はまだ繋がっていた。

『そろそろ潮時じゃないの？しつぽ巻いて逃げる方法はいくつか教えたでしょ。手に負えなくなる前に早く帰ってきてよー。お腹ペコペコで死にそうだからさー』

電話の向こうから聞こえてくる声には、ノイズが混じっていた。それも到底デジタルとは言い難い難い音質のノイズが。

「お姉ちゃん、そんなこと言いながら、おせんべい食べながら話し

てるでしょ。しかもソファーに寝転がってテレビ見ながら」

電話とはいえ、憮然とした表情は伝わったようだ。

「こっちは大変だっていうのに」

『だ、だってさー、本当に死にそうなんだから……』

慌てて言い訳をする。

姉妹以外に電話の向こうの言葉は聞こえないが、その内容はだいたい想像がついていた。

「まったく、あんた達の漫才聞いてるとやる気が失せるんだよ！」

上段から斬りつけた切っ先は、わずかに鼻先に届かず、逃げ遅れた髪を数本、宙に舞わせたに過ぎない。

もう一步踏み込み、返す刀で今度は下段から斜め上方へ薙ぎ払うが、それを予想していたかのように、大きく後方へと跳んで間合いを開けた。

「ええと、じゃあパターンAでいこうかな」

その場で屈み込むと、低い姿勢のまま胸の前でクロスした両腕を左右へ勢いよく振る。

「えい！」

気合いというには気の抜けそうなかげ声と共に、足下から湧き起こった波動は、コンクリートの表面を削り取りながらはづきという少女へと向かってさざ波のように押し寄せる。

タイミングを見計らって軽く跳躍し、ゆっくりと近づいてくるそ

の波動を余裕を持ってかわすと、空中で姿勢を整え反撃へ移ろうとした。

その瞬間、栗色の髪を揺らしながら屈み込んでいた小柄な体が勢いよく立ち上がり、オーケストラの指揮者よろしく、両手を天に向かって突き上げる。

それを合図に波動は線から面へ、ベクトルを水平から垂直へと変化させた。

薄くそがれ、砂よりも細かい灰色の粒子と化したコンクリートは、一気に上空へと舞い上がり、刀を手にした少女の体を包み込む。

視界を失った少女は、気管へ容赦なく進入してくるコンクリート粉末にむせながら、バランスを崩して落下した。

灰色の空間に囚われ、目を開けることさえままならない。

咳き込みながら片手で鼻と口を覆い、かろうじてもう片方の手を頭上に挙げると、立てた人差し指をくるりと2回ほど回す。

つむじ風、というより小型竜巻と言っても過言ではない大きさの空気の流れが巻き起こり、幾重にも重なる灰色のカーテンをきれいさっぱり吹き飛ばした。

視界はクリアになったが、のどの粘膜にへばり付いたコンクリートの粉末を排除するには、数分を要した。

咳き込む感覚がようやく収まり、落ち着きを取り戻す。

周りを見回すが、人の気配は全く感じられない。

どうやら言葉通り、しっぽを巻いて逃げたようだ。

「フン」

軽く鼻を鳴らすと、ビルの端、あの少女が座っていた辺りまで歩いていく。

視線を下方へと移すと、ちょうど向かい側にあるビルの出入り口から、一組の男女が出てくるところだった。



ビルの正面玄関から右を向くと、100メートルほど先に地下鉄の出入り口が見えた。

並んで歩きながら、一真が口を開く。

「蓮見さんはどう思う？あの人達の話」

唇に人差し指を当ててしばらく考えてから、素子は答えた。

「話の内容はともかく、あの人達に関しては悪い人じゃないとは思  
うんだけど……」

「あ、そうか。蓮見さんは心が読めるんだっけ」

一真の言葉に慌てて手を振りながら、素子は訂正する。

「でも、三咲君にやったように、積極的に心の中まで入っていった訳じゃないから、確実なことは言えないんだけど……あくまでも受け身の状態で感じた限りでは、悪い印象は受けなかったんです」

「でも、公の機関とか公務員とか、本当かなあ？」

「でも、あとですぐにバレてしまうような嘘はつかないと思います。  
あの人達、頭良さそうに感じたから」

確かにその考えは一理ある。

「あー、頭がこんがらがってきたなー」

思わず天を仰ぐ一真に、素子は控えめに提案した。

「今、ここで答えを出す必要はないと思うんです。家に帰ってご飯を食べて、お風呂に入ってリラックスして、それからじっくり考えてみて。結論を出すのはそれからでも遅くはないと思うんですけど、どうでしょうか」

その提案に一真も同意した。

「そうだな、この件は明日、また会って相談しようか」  
「はい！」

まだ出会ってから1日ほどしか経っていないが、素子の表情が時を経るごとに生き生きとしてきているのがわかる。

まるで、今まで抑えてきた感情を取り戻すかのようだ。

昔の彼女を知っている者には信じられないこともかもしれない。初対面の時の、あの思い詰めた様子はもう感じられなかった。

(自分と出会ったことが良いきっかけになってくれているなら)

地下への階段を並んで下りながら、一真は楽しそうにしゃべる横顔を見てそう思った。

.....

二人が地下へと消えていく様子をオフィスの窓から確認すると、瑠美は大きく息をはき出した。

眉間に張り付いていた緊張感が一気に落ちる。

「お疲れ。『心讀使い』が相手だとさすがに応えるだろ？心に壁を作るのも楽じゃないからな」

振り向くと、開け放たれたドアに寄りかかるようにして黒津が立っていた。

瑠美は視界に表示された時刻表示にチラリと視線を向ける。

午後7時30分を回っていた。

あの二人を喫茶店まで迎えに行ってから、2時間を越えている。

「そうね、これくらい時間が限界ね。本当はあの子達を家まで送っていつてあげれば好感度アップなんだろうけど、ちょっと無理かもしれない」

「でもよ、僕ちゃんの方とはもかく、お嬢ちゃんはどうするんだろうな。いつかは俺たちの『目的』ってやつを教えなきゃなんねえだろ？あの子、拒否反応を起こしそうなタイプに見えたけどな」

「そこは『教育班』の腕の見せ所。私の仕事は『取り込み』まで。

その後で失敗してもそこまで責任はとれないわ」

「その縦割り感覚、やだやだ、官僚主義って奴に毒されてるねえ」

「なんと言われようと私は人の仕事にまで手を出すつもりはないし、そんな余裕もないの。『取り込み』さえ成功したら私の実績になるんだし、それ以上のボランティアをする気はさらさら無いわ」

そう言っただけで窓際から離れると、椅子に座ってデスクにビルトインされた端末のスイッチを入れる。

黒津は椅子には座らず、瑠美の隣のデスクに腰掛けた。

「まあ、何でもいいや、実績さえ上がれば。俺もカリカリしてる課長に八つ当たりされるのはご免被りたいしね」

端末が起動するまでの間、瑠美はデスクの上に置かれた布製の黒

い手提げから丸い缶を取り出すと、ふたを開けて中に入っているクッキーをつまんで口に放り込んだ。

起動した端末からネットワークドライブに接続し、報告書用の書式を呼び出したとき、出入り口のドアが開いた。

「ただいま戻りました」

一仕事を終えたポニーテールの少女がオフィスへ入ってきた。

「お帰り、はづき。遠いところご苦労さま。で、どうだった？」

瑠美の優しげな視線とねぎらいの言葉にちよっとはにかみながら、はづきと呼ばれた少女は答えた。

「やっぱりただのペテン師でした。超能力っていうのは名ばかりで、全部手品の延長。頭に来たから仕掛けの釣り糸を1本切ってやったから、メチャメチャ焦ってた」

そう言つとケラケラと屈託なさげな笑い声を上げた。

「そう。まあ期待してなかったから、しょうがないわね」

「瑠美先輩、早く元のシフトに戻してくださいよ。私、3ヶ月連続で確認班なんですよ。インチキ超能力者の調査は、もううんざり」

「そう文句言わないの。真澄が帰ってくるまでは、どうしても人数が足りないんだから、我慢して」

瑠美がたしなめるような口調で言った。

「いいよなー、真澄は。海外行けてさ」

「仕方ないでしょ？帰国子女の真澄くらいしか適任者はいないんだ

から」

「私も英語くらい喋れたらなー」

並んだデスクの一番端に位置する、1ランク上等そうな肘掛け椅子に体を預けると、思い出したように言った。

「そういえば、さっき向かいのビルの屋上に『総研』のチビっ子がいたんで、追っ払っておきました」

「あら、そうだったの？悪かったわね、手間取らせちゃって」

そう言いながら、はづきの視線がデスクの上に注がれていることに気が付くと、瑠美は缶を手にとって差し出した。

「食べる？」

「えっ、いいんですか？」

「ちよつと作りすぎちゃって一人じゃ食べきれないから、良かったら好きなだけどうぞ」

「いったただきまーす」

言っが早いか、チョコレートクッキーを二つまとめて口に入れた。

「単なる視察かな？定期便の」

黒津の問いに、クッキーをほおばったままの口で答える。

「そんな感じじゃなかったな。多分、あいつ、自分の姉貴と話してたんだろっけど、電話の内容からすると、ここに来ていた二人のこと知ってるって口振りだったし。ルーティーンの敵情視察じゃなくって、あの二人をマークしてたみたい」

「なんでわかつたんだろっうな。今日まで女の子との接触はずっと外

でやってきたんだろ？進藤先生が接触場所まで尾行されるようなドジ踏んだとは思えないし。ウチの施設に連れてきたのは今日が初めてだから、そつちから足がついたとは考えられないしな」

「今日来た男の子、一条の生徒でしょ？だからじゃないですか」

三つ目のクッキーを口に入れながら、はづきが言った。

「ちびっ子も、その姉貴も揃って一条に通ってるから、男の方に目を付けてたんじゃないかな。それで男をマークしてるうちに女と出会ってしまった、ってところじゃないかと思うんだけど」

「なるほど、それなら納得。でも、そうなると急いだ方がいいんじゃないの？向こうもアプローチしてくるだろうし」

「そうね」

瑠美はディスプレイから視線を動かさずに答えた。

「予定を前倒ししたほうが賢明かもね」

「じゃ、忙しくなる前に、ひとつ、ご一緒にディナーなんてどうだい？」

黒津の誘いに、瑠美は首を横に振る。

「せっかくだけど今日は遠慮しておく。これまでの報告書を仕上げてしまいたいから」

「そりゃ残念。デートはまたの機会のお楽しみっておくか」  
「圭次君、いつものことだけど、あたしは誘ってくれないんですね」

はづきは、ちょっと拗ねたように口をとがらせた。

「子供には聞かせられない、大人の話つてのがあるんだよ」

「そういう圭次君もまだ二十歳前じゃない」

「お前より三つも年上だぜ。19歳は十分大人だな。酒もタバコも選挙も運転も……」

「運転以外はまだダメでしょ」

ピシヤリと言われて、とぼけた口調で話を混ぜ返す。

「ああ、そうだった。まあ、そんなことはどうでもいい。それより何より問題なのは、『柳井はづき』っていったら『夜の街のアイドル』だからな。俺なんか連れて歩いてたら、ちよつと怖い男子中高生諸君に絡まれてボコボコにされちまう。」

二人の掛け合いに瑠美が割って入る。

「へえー、はづきってそんなふうに呼ばれてるの?」

「もう、瑠美先輩までそんなこと言う!」

ふくれっ面のはづきに睨まれた瑠美は、そっちには笑顔を返しておいてから、黒津に向かって言った。

「冗談はそれぐらいにして、私に気を遣うこと無いわよ。二人で行ってきなさいよ。この辺りの店なら繁華街から離れてるし、あなたにガン付けてくるお子様達もいないでしょ」

黒津は腰掛けていたデスクから下りながら、

「まあ、たまには若者と親交を深めるのも悪くないかな」

そう言つと、ドアに向かって歩き出す。

「んじゃまあ、お言葉に甘えて行くとするか、若者よ」

はづきに向かって声を掛けると、

「じゃ、おつかれ」

頭の上で右手をヒラヒラと打ち振りながら、部屋を出て行く。慌てて椅子から立ち上がったはづきは、

「瑠美先輩、すみません。お先に失礼します」

そう言って頭を下げると、黒津を追って部屋から出る。

「おつかれさま」

ディスプレイから顔を上げた瑠美は、出て行く二人の背中に向かって声を掛けた。

ドアが閉まると、それまでの騒がしさが嘘のように室内は静寂な空間へと戻る。

エアコンの音だけが微かに響くなか、瑠美は淡々と文章を仕上げていった。

.....

「ターゲットの二人は、さっき地下鉄に乗っていったよ。明日も会うようなこと言ってた」

帰宅を急ぐ人の群れの中には、コンビニエンスストアの店先でカ



フエオレを飲みながら電話をする女子中学生のことなど気にする者はいない。

目の前を足早に通り過ぎていくそんな人々を眺めながら、少女は話を続けた。

「でも、こつちも動いてることがバレちゃったから、『ラボ』も急ぐんじゃない？」

『そうかもしれないわねー。じゃあ、明日、香寿美さんに相談してみる。こつちも対応を考えないと』

相変わらず電話の向こうから聞こえてくる声は、緊迫感とは無縁の響き。

『それはそうと、何時頃に帰ってくるの？』

こつちという言い方は、暗に早く帰ってこいという催促だ。

「慣れないこととして疲れちゃったし、バスで帰るから。あと30分くらいかな」

コンビニの前にあるバス停から乗れば、乗り換えなしの1本で自宅近くまで行けることは確認済みだ。

『えー、30分もかかるの？』『シフト』すればすぐに帰ってこられるのに』

しつこく食い下がる姉の言葉に、やや切れ気味な返事を返す。

「あのねえ、お姉ちゃんと違って、私は殴る蹴るとか体を使うのは苦手なの。わかる？どれだけ私が疲れてるか。それを『シフト』し

て帰ってこいなんて、よく言えるわね。12ラウンド闘ったボクサ  
ーに今度はフルマラソン走ってこい、って言うようなものなのよ」  
『ああ、ごめん。わかったから』  
『だいたいお姉ちゃんは……』

姉妹の立場が逆転した会話は、5分後にバスが到着するまで続い  
た。

同じ『力』を持つ者達による組織、その組織への『勧誘』。

大げさに言えば人生の転換点、身近なところでは、明日からの放課後の過ごし方が変わるかもしれない、そんな決断を迫られている。一条学園からほど近いファーストフード店の2階で、ポテトをつまみながら相談する高校生二人にとって、それは重くのしかかってくる問題だ。

「俺、実を言うと、まだ結論が出ないんだ。昨日の話では、嘘をついているようには感じなかったんだけど、何かを隠しているんじゃないか、って。その思いがどうしても消えないんだよな」

昨日は、なかなか寝付けないほど悩んで考えた末、結論まではたどり着けなかった。

「私はあの人達に協力してもいいかな、って思ってるんです。昨日も言ったように、悪い人たちには思えなかったし、それに自分のこの力について、少しでもいいから情報が欲しいんです。あの人達はその願いを叶えてくれるかもしれない」

時折、大きなあくびを漏らす寝不足の一真とは対照的に、すつきりとした表情の素子は、肯定的な意見を述べた。

「言ってることが本当かどうか、隠し事は無いのか。調査できたらいいんだけど、俺達にそんな探偵みたいなのは無理だしな」

トレイの上からつまみ上げたポテトを3本ほど、まとめて口に放

り込む。

一真達のような学生や親子連れで店内は混雑していた。

3歳くらいだろうか、テーブルの間を縦横無尽に走り回る男の子を追いかけて、若い母親が二人の横を走りすぎていった。

何とも言えない、重苦しい沈黙が続く。

それを破ったのは、素子の言葉だった。

「わかりました。じゃあ、次に会ったとき、私があの人達の心の中を探ります。その結果で判断するというのはどうですか？」

それは、意外な提案だった。

「蓮見さん、そんなことをして、大丈夫？」

他人の心を読むことが出来る。

過去に、その力でつらい思いをしてきた素子である。

かつて学校にも行くことが出来ず、自分の殻に閉じこもるしかなかった素子のことを思えば、他人のネガティブな感情に触れたとき、どれだけの苦痛を伴うのか想像に難くない。

だが、素子は力強く頷いた。

「大丈夫です」

そう言い切った顔は自信に満ちたものだった。

「私、傷つくのが嫌だから、この力を使わないようにしてきました。それが自分を守る唯一の方法だと信じていた。でも違うんですよ。今までの私は、現実から目をそらして逃げていただけなんです。そんな気持ちのままじゃ、いつかは同じことの繰り返しになる。もう、あのときのような思いはしたくない。だから……」

にこりと微笑んだ顔に、迷いは無かった。

「だから、決めました。私はもう逃げないって。この力を含めた自分自身と向き合おうって、決めたんです」

そこまで覚悟を決めているなら、反対する理由はない。

「わかった、そうすることにしよう。でも、苦しかったすぐにやめていいから」

「わかりました」

もう一度素子は頷いた。

頷き返した一真だったが、疑問が一つ、頭に浮かんだ。

「例えばさ、相手が嘘をついているかどうかって、はっきりとわかるものなの？」

考え事をするときの癖なのか、唇に人差し指を当てながら素子が答える。

「そうですね。嘘の向こうに本心が透けて見えるていうか……言葉で言い表すのは難しいんですけど、嘘だけが浮いた存在として感じるんです。だからわかるんですけど、でも……」

「でも？」

「何かで読んだことがあるんですけど、『下手な詐欺師は嘘で自分を装うからバレる。真の詐欺師は自分の嘘になりきるからバレない』って。つまり、嘘を嘘と思わない人の場合、私でもわからないかもしれません」

「今までにそんな事ってあった？」

その質問に、若干表情を曇らせる。  
あまり思い出したくない事なのだろう。

「一人だけ、いました。すぐにバレるような嘘を平気でつく子だったんですけど、偶然、その子の心を見てしまったんです。でも、私には嘘をついていると感じられなかった。明らかな嘘だったにもかかわらず、です。つまり嘘を嘘と思っていなかったんです。その子の中では全部本当の事として口にしていた。だから私にはわからなかったんだと思います」

「じゃあ、例えば昨日会ったあの人達に同じようにされたら、蓮見さんでも相手の本心を見抜けないってこと？」  
「そういうことになりますね」

そう言うのと、ちょっと考えた後に言葉を続けた。

「でも、方法が無い訳じゃないと思います。その、嘘つきの子にも一人だけ味方になって庇ってくれる友達がいたんですけど、ある時、その友達の堪忍袋の緒が切れて、『もう絶交だ』って言われたんです。よほどシヨックだったんでしょうね、絶交と言われた瞬間、涙をぼろぼろこぼしながら、『ごめんなさい、ごめんなさい』って何度も繰り返し……その時、本心が見えたんです。嘘で出来た壁が崩れて、中から本当の心が姿を現した、そんな感じでした」  
「と言うことは、相手を動揺させたらいいのか……」

だが、昨日会ったばかりで何も知らないに等しい相手を動揺させるセリフなど、思いもつかない。

うーん、と唸りながら、ああでもないこうでもないと考えている横を、グラスを乗せたトレイを手にしたOLが通る。

空いた席を探しているその足元に、さっきから走り回っていた男

の子がトップスピードで衝突した。

「あっ！」

トレイから飛び出したグラスが宙を舞う。

空中に放たれた褐色の液体は、一真の胸元へ一直線に向かっていったが、その直前できれいに左右に分かれ、床に落ちた。

「ごめんなさい！」

OLと男の子の母親の二人が異口同音に謝罪する。

「あ、いや、奇跡的に一滴もかからなかったみたいなので、大丈夫です」

実際、白いカッターシャツにはシミ一つ見あたらなかった。頭を下げながら、衝突事故の当事者達は階下へと去っていく。

「今の、蓮見さんが？」

床を拭き終えた店員が行ってしまったのを待って尋ねてみた。

「あ、はい。とっさにやってしまいました」

物理の法則をねじ曲げて、液体の進行方向を変えたのだ。

おかげで、制服がコーヒーマークに染めにならなくて済んだ。

「ありがとう。でもビックリしたな」。あの男の子、走り回って危ないとは思ってたけど、まさか自分が被害を受けそうになるなんて考えなかったからな」

そこまで口にする、ある考えが閃いた。

「そうか、何も言葉にこだわることはないんだ。要は相手の想像もつかないようなことをすれば……」

「何のことですか？」

「いや、例えばさ……」

そこで、考えついた『例え』を話してみた。

「でも、そんなことをして本当に大丈夫なんですか？万が一、怪我でもさせたら……」

「大丈夫……だと、思う。多分……」

徐々にトーンダウンしていく言葉が、素子を若干不安にさせたが、

「でも、あの進藤さんって人、ベテランというか何かの達人って雰囲気だったし、それくらいのことをしてても平気かな……」

昨日も間近に見た引き締まった体躯や颯爽とした身のこなし、自信にあふれた表情を思い浮かべて、納得することにした」

「じゃあ、決まりだね」

「返事はいつしますか？」

そうだな、と腕組みをしながらしばらく考えていた。

「善は急げ、じゃないけど今すぐに返事をするのはどうかな。昨日の今日で決めてくるとは思っていないだろうから、ある意味不意打ちになるし。それで、いい？」



素子は頷いて同意した。

これで順調に事が運べば、遅くとも数時間後には結論が出ていることになる。

そう思うと、急にプレッシャーを感じて、一真は身震いした。

「蓮見さんは、不安じゃない？」

思わずそう訊いてしまうのは、自分が不安で一杯なことの裏返しだ。

「それを言い出したらきりがありませんから……大丈夫です、きっと」

笑顔で答える様子を見ながら、

(本当は芯が強い子なんだな)

対比して自分の弱さを恥ずかしく思う。

(変わらなきゃ、な。俺も)

自分を変える、その鍵を握っているのは何なのか。

一真には、まだ、わからない。

.....

「ありがとう。一度に二人も仲間が増えることになって、私も嬉し  
いわ」

三人がいるのは、昨日と同じ喫茶店。

あれから素子が電話をすると、瑠美は待ち合わせに1時間後の時刻とこの場所を指定してきた。

きっかり1時間後に三人は落ち合い、一真と素子は瑠美の組織に協力することを告げたのだった。

「昨日の今日で返事がもらえとは思っていなかったから、電話をもらったときはちょっとビックリしたけどね」

カップを手にとると、レモンティーを口にする。

「じゃあ、これからの予定を説明しておこうかな。前にも言ったけど、謝礼金の支払いなんかが発生するから、書類を作ってもらわないといけないし」

「あ、じゃあ、メモしとこう」

鞆の中から手の平サイズのメモ帳と、ノック式のボールペンを取り出す。

それを見た瑠美は、以外といった表情を浮かべる。

「ペンなんて持ち歩いてるの？若いのに珍しいわね」

紙で出来たメモ帳を備忘録として使っているのは年配者くらいのものだ。

普通は、頭に思い浮かべたことを記録するアンプの機能を使うのが一般的だ。

照れ笑いを浮かべながら、一真が説明する。

「実は、学校でレポート書かされることが多くて、それで普段から

ペンで紙に字を書く練習をしようかなと思って」

「私も優等生とはいえなかったから、ずいぶんと書かされた覚えがあるわ」

そう言っただけで過去を懐かしむかのような表情をみせていた。

一真はメモ帳の表紙をめくり、ペンを走らせる。

「あつとつとつ」

手からこぼれ落ちたペンは、床を転がってテーブルの下へ入り込んだ。

その様子を見て、笑みを浮かべながら瑠美が言った。

「持ち方から練習しないといけないようね」

再度照れ笑いをした一真は、テーブルの下へ屈み込んだ。

そのタイミングで、ミニスカートから伸びた足が組み替えられる。

(いかん、いかん)

目の前で繰り広げられた光景に思わず見とれてしまった自分に湯を入れると、床に落ちていたペンを拾い上げた。

先端が手の平から出るようにして軸をしっかりと握る。

一度、大きく深呼吸をする。

「見つかった？」

「あ、はい」

返事をしながらゆっくりと体を起こしていく。

瑠美の視線が自分から外れた瞬間、ペンを握った右手に力を込め

て、整った横顔めがけて思い切り突き出す。  
ナイフで人を刺すかのごとく、ありったけの敵意を込めて。

「何のつもり？」

詰問の声が冷たく響く。

さっきまでののにこやかな笑顔は微塵も残らずに消え去り、鋭い視線が真正面から一真の目に突き刺さる。  
突き出したペンの先端は、眉間まであと数センチの位置で停止していた。

「う、くっ！」

動かそうともがいても、右腕はびくともしない。  
腕の周りの空間が、まるでプラスチックみたいに固まってしまったかのようだ。

瑠美は、両手をテーブルの上に置いた姿勢を崩していない。

「冗談にしてはやりすぎね」

うら若き女性とは思えない、凄みのある声だ。

しかし一真は、その声を聞き流し、隣に座っている少女の様子を横目で探る。

その視線を辿った瑠美も気が付いたようだった。  
芝居じみた行動の真の意図を。

「……だめ……できない……」

小柄な体が細かく震えていた。

両腕で胸を抱きしめ、その震えを止めようとしているが、体はい

うことをきかない。

うつむいた横顔は、まるで陶器のように白かった。

「ごめんなさい……あなた達と一緒にには行けない……」

血の気が引いた唇からそれだけを絞り出すように言つと、素子の体は大きく傾いた。

倒れかかる肩を一真の両手が掴む。

「大丈夫か？」

抱きかかえるようにして支えていると、少しずつだが震えが収まってくる。

「ごめんなさい、もう大丈夫」

ようやく顔にも血の気が戻ってきた。

二人は視線を合わせると、無言のまま頷き合った。

「そういうことで、俺達二人、あなた達の仲間にはなれません。期待させて悪かったけど」

無表情のまま瑠美は二人をじつと見比べていたが、

「そう。残念だけど、仕方がないわね」

つぶやくように言った。

「じゃあ、これで」

二人は席を立った。  
足がふらつく素子を、一真が支える。

「送って行かなくて大丈夫？」

「大丈夫です。俺が家までついて行きますから」

二人は軽く頭を下げると、瑠美から視線を外さないようにして店を出て行く。

「さよなら。気を付けてね」

最後に投げかけられた抑揚の無い声が、二人の心の奥底に不気味に響いた。

(12) 妥協点

「ホントに大丈夫？」

「ごめんなさい。もう平気です」

全身の震えは止まっているし、顔色も元に戻りつつあった。

一真の支えが無くても、なんとか一人で歩くことはできている。

「そうか、ならいいんだけど。でもちょっとビックリしたな、いきなり震えだしたから」

「私も、あんな事になるとは予想してなかったから……でも、もう大丈夫です」

店が見えなくなるところまで来ると、一真は待ちきれない様子で尋ねた。

「それで、どうだった？あの人、やっぱり嘘をついてたり悪いことを考えてたのかな？」

「それが……」

言っているのかどうか迷っているような、ちょっと複雑な表情を浮かべていたが、やがて心を決めて話し出した。

「犯罪者とか、そう言った意味での悪い人じゃないことは確かです。嘘をついているような感じも受けなかった。私達をだまそうとか、そういうった悪意みたいなものも感じられませんでした。悪人か、そうじゃないか、と訊かれたら、私は『違う』と答えると思います」

「えっ、それじゃあ、何故……」

思わず立ち止まった一真の顔を見ながら素子は答えた。

「あの人は、ものの考え方、価値観、判断基準、そういった根本的なところが全く違っていたんです」

「だけど、考え方の違う人なんて、いくらでもいる訳じゃない？俺と蓮見さんでも違うわけだし。あの人の場合は、何が違ってたんだろ？」

それはもつともな疑問だ。

素子は自分の考えを説明した。

「確かに、全く同じ価値観の人なんてあり得ないかもしれない。他人同士、違うところの方が多いでしよう。でも、あの人の場合は『違う』だけじゃなかったんです。私にとってどうしても受け入れられない考えの持ち主だったんです。そう、心の中を覗いている間、違和感で吐きそうになるくらいでした。交わる場所が無い、って言えばいいのかな。自分とは全く異質な思考の中に無防備で放り込まれたような感じがして……気が付いたら相手の中から逃げ出していました。本能的に自己というものを守ろうとしたのかもしれない」

そこまで話すと、申し訳なさそうに小さな声で謝る。

「私の主観でどうするか決めてしまったみたいで、ごめんなさい」「いや、謝る事じゃないよ。そう感じたんなら、俺も蓮見さんの判断を信じるよ。でも悪かったな、苦しかったんじゃない？あんなに顔色が真っ白になって震えてたし」

「三咲君の時とは全く違ってたから、正直、苦しかったのは事実です。でも、隣に三咲君がいてくれたから、一人じゃないんだって、



そう思えたから。だから、何とか耐えられたんだと思います」  
「いや、俺は何にもしてないし……そんな風に言われると、何だか照れるな」

はにかみながら頭を掻いている一真を見て、素子にもようやく笑顔が戻ってきた。

.....

「……はい、結果的には失敗です。申し訳ありません。……え？いや、しかしそれは……」

一人残った瑠美は、ひとしきり電話で状況を説明していたが、途中から雲行きが怪しくなっていた。

相手はどうやら目上の様子。

反論する瑠美の言葉など聞く耳を持たないようだった。  
やがて、根負けしたかのように相手の主張に同意する。

「……はい、わかりました。終わればすぐに一報入れます。では……」

電話を切ると、うんざりした表情で深いため息を漏らし、背もたれに体を預ける。

「なかなかやるじゃん、あの二人」

いつの間にか現れた黒津は、さっきまで一真が座っていた席に腰掛けた。

「いつも冷静沈着、クールビューティー進藤さんを動揺させて本心を暴き立てるなんざ、素人にしちゃあ上出来、上出来」  
「私、動揺なんかしてないわよ」

無然とした表情で答える。

「そうだな、動揺、じゃないな。不意をついた攻撃に本能的に反応した。その時、一瞬だけ優しいお姉さんの仮面が剥がれた、ってことだな。敵意に対して同じように敵意で返してしまったから、そこに隙ができたんだろうな」

「すぐにリカバリしたつもりだったけど。私にも油断があったことは否定しない。早くしなきゃ、と考えていたところへ、向こうから返事があったから。つい、喜びすぎてしまったのね」

「でもよ、一瞬だけ開いた隙を突破口にして深層心理にまでねじ込んでいったわけだよな。やることがえげつないねえ。あのお嬢ちゃん、おとなしそうに見えて案外やり手だな」

テーブルの上には一真と素子が手をつけずに残っていたグラスが二つ、置き去りにされていた。

頬杖をつきながら、黒津がストローでグラスの中の氷をくるくる回すと、カランと涼しげな音色が響く。

「で、どうするんだ、これから。このまま放置するのか？」

「私としては、そうしたかったんだけどね。でも『処置』しろって、うるさく言うのよ」

「さっきの電話、課長か？」

あからさまに渋い表情を作る。

「そう。散々文句と嫌みを言われたわ」

「『処置』って、どのレベル？」

「一番下。レベル3」

それを聞いて、黒津の表情は更に渋さを増した。

「でもなー、あの二人、特にお嬢ちゃんの方がそれで納得するとは思えないんだけどな」

「それは私も同感。おそらく徒労に終わる可能性の方が高いでしょうね。そう思っただいぶ粘って抵抗してみたけど、無駄だった。まあ元々、まず結論ありきの人だから。所詮、私達の意見なんて求めていないからね」

「ということは、説得できると本気で思ってるのかね？それとも取り込みの実績数だけ上がればいいと思ってるのか……それだったら本末転倒もいとこだな」

「私も昨日までは同じ考えだったから、人のことを非難する資格はないけどね」

自嘲気味に瑠美はつぶやいた。

渋面を和らげながら、黒津が質問する。

「で？こんな状況でもやるのか？」

「そうね。私は自分の仕事は自分の力で最後まで成し遂げたいの。たとえ意に染まないことでも、自分に課せられた以上は」

「ふーん、いい心がけじゃないですか。組織人の鑑だね。じゃ、まあ、あとは頑張ってくださいよ、俺はそろそろ帰るから」

「なに言ってるんの、あんたも手伝うのよ。この案件の従事者にはあんたの名前も入ってるんだから」

席を立とうと腰を浮かせた格好のまま、抗議の声を上げる。

「おいおい、ちょっと待てよ。勝手に俺を巻き込まないでくれる？」  
「勝手に、じゃないわよ。昨日、あの子達と接触したとき、あんたも一緒にいたでしょ？報告書にはちゃんと入ってるんだから」  
「あ、きつたねーな。さつき、自分の仕事は一人でやりきるって言ったばかりじゃねーか」  
「『一人で』なんて一言も言っていないわよ」

澄ました横顔に目をやりながら、黒津はあきらめの表情を浮かべる。

「ちえっ、しょうがねーな！。手伝ってもいいけど、あくまでサブだぜ、いいな？」  
「いいわよ。手が足りなくなった時に助けてもらえれば」

笑顔の瑠美とは対照的に、浮かない顔の黒津が質問する。

「で、いつやるつもりなんだ？」  
「今からよ」  
「えらい急だな」  
「私、せっかちなのよ。知ってるでしょ？」

そう言ってティーカップを手に取る。

「待つのも待たせるのも大嫌いなもの」

言い終わると、冷めてしまったレモンティーを一気に飲み干した。

「行くわよ」

空になったカップをソーサーに置いて席を立った瑠美に続いて、  
やれやれ、といった表情で黒津も立ち上がった。

「サツとやってすぐにケリが着けば、デートに付き合っ  
てあげるからさ」

それでもやる気の見受けられない相棒を追い立てるようにして、  
見た目だけはカップルのような二人は店を後にした。

( 13 ) 動き出す

三咲一真は後悔していた。

タクシーを使って自宅まで送っていけば、こんなことにはならなかったのに、と。

素子の様子は、徐々にはあるが普段どおりに戻りつつあったし、「外の風に当たりたい」

と希望したことから、『雑踏の中を歩くよりは』と考えて帰路にある丸山公園の中を通過して行くことにしたのだが、それが運のつきだった。

その人影に気がついたのは、上り坂になった遊歩道を二人並んで歩いているとき。

逆光で顔はよく見えなかったが、坂を下りてくるのが髪の長い女性であることは認識できた。

最初はそれほど気にも留めなかったが、近づいていくうちに二人の表情が険しくなる。

坂の途中で立ち止まっても、その人影は歩く速度を緩めることなく、見る見るうちに姿が大きくなる。

およそ10メートルの間合いを置いて立ち止まったときには、その相手が誰なのか、はっきりとわかっていた。

「こんなに早く再会とは思ってもみなかったかな？もう二度と見たくない顔かもしれないけど」

笑顔で話しかけてくる瑠美の言葉に、二人の表情はいつそう硬くなる。

背後からの気配を感じたのはその時だ。

ハツとして振り返ると、遊歩道のすぐ脇まで張り出した雑木林の木にもたれかかって立つ黒津の姿があった。

夕日を受けて髪の毛の金色が輝いて見える。

(囲まれた)

相手は二人しかいないのに、そう感じてしまっくらい前後から受けるプレッシャーは尋常ではない。

「顔色がよくなってきたみたいだけど、気分はどう？もう大丈夫なの？」

一真の後ろに隠れるようにして立っている小柄な体が、ビクツと反応する。

「もう少し話したいんだけど、いいかしら？」

二人を交互に見ながら言ったその言葉は、穏やかな口調で発せられたにもかかわらず、抗いがたい威圧感を持っていた。

「道の真ん中で話をするのも何だから」

そう言っつて、林の中へと入っていくのに呼応して、追い立てるように黒津がゆっくりと近づいてくる。

二人は瑠美の後についていくしかなかった。

立ち止まったのは、木々が途切れて広場になっている場所。

その真ん中で瑠美が振り返る。

「実はね、私の上司がどうしても君達二人と話がしたい、って言っ

てるの。これから一緒に来てもらえないかしら」

一真の背後では、最後尾を歩いていた黒津が広場の端に横たわる倒木に腰掛ける。

退路を断たれた格好だ。

「さっきも言ったように、悪いんですけどあなた達には協力できません」

「つまり、来てはもらえないってこと？」

一真は無言で頷く。

逃げ出したくなるような緊張感に耐えながら。

「そう、それじゃあ仕方がないわね」

「えっ？」

予想に反して瑠美があっさりと引き下がったので、思わず声を上げた一真は素子と顔を見合わせる。

「残念だけど、あきらめるわ」

その言葉を聞いて、二人はちょっと拍子抜けしたが、とりあえず胸をなで下ろす。

「じゃあ、俺達はこれで」

一真が一步目を踏みだそうとした。

「待ちなさい。帰っていいなんて、ひと言も言ってないわよ」



広場に冷たい声が響く。

「えっ、でも俺達のことはあきらめるって……」

「私は君達を説得するのをあきらめた、と言っただけ」

そう言いながら右手をゆっくりと上げていく。

「これからは腕力に頼ることにするわ。こんな手段を使うことにならなくて、本当に残念」

口角をわずかに上げたその表情は、見る者の背筋を凍らせるような冷たさを持っていた。

「大丈夫、ほんの少し眠っててもらっただけだから」

はっ、と短く息を吐きながら、左の肩口まで上げた右手を水平に一閃する。

敵意が込められた、圧倒的な力の波が襲いかかってくるのを感じた。

一真は咄嗟に素子を抱きかかえ、力の源に背中を向ける。背後からの衝撃を覚悟して全身を硬直させたが、一向にその瞬間は訪れない。

奇妙な静寂を破ったのは、聞き覚えのない少女の声だった。

「ふうー、何とか間に合った。間一髪、ってところかな。何か私、格好いいんじゃない？」

振り返った一真の目に、少女の後ろ姿が映った。

霧がまとわりついてるように体の輪郭がわずかにぼやけて見える。

風もないのに長い黒髪が舞い、スカートの裾が翻っていた。

「大丈夫？」

そう言った横顔は、思わず見とれてしまっくらい均整のとれたラインで構成されていた。

一真の目には、頭のカチューシャがアンバランスに映る。

「また邪魔しに来たの？いいかげんにしてもらいたいわね」

苛立ちを含んだ瑠美の言葉に、少女は場違いなほど楽しそうな口調で答える。

「いいじゃない？たまには一緒に運動するのも。デスクワークだけじゃ体が鈍っちゃうでしょ？」

「だったら、お望みどおり相手してあげるから」

一瞬、その姿を見失うほど瑠美の動きは俊敏なものだった。人間の限界を遙かに超えたスピードで、瑠美の攻撃が繰り出される。

しかし、少女の楽しそうな表情は変わらない。

的確に隙をついてくる力を、すべて受け流しているように見える。

「チッ」

小さく舌打ちすると、瑠美は一旦大きく後方へと跳んで間合いを開けた。

「相変わらず、のらりくらりとかわすのだけは上手ね」

「お褒めにあずかり光栄です」

そう言いながら少女は大袈裟にお辞儀をして見せた。

「さあ、今の内に逃げるわよ」

突然の声に、一真は一瞬、混乱した。

いつの間にか一真の隣に女が立っている。

長身の体に黒いスーツを纏ったその女の姿を見て、黒津が腰掛け  
ていた倒木から飛び降りる。

「ちょっと、ちょっと、そんなことされたら困るんだよな！。万難  
を排してでもその子達を連れて来いって命令受けてるんだからさあ」

いつもの軽い口調で言葉を続ける。

「姐さんも組織人なんだからわかるだろ？上司の命令には逆らえな  
いことぐらいは、さ」

女が答える。

「そうね、よくわかるわ。私も同じ指示を受けてるからね、私の  
上司から。あなた達のように、『実力行使を伴う同行』じゃないけ  
ど。レベル3だったかしら？その命令って」

一真は状況を理解しようとして頭をフル回転させた。

どうやら対立する二つの組織があるらしい。それは間違いない。

俺たちはその間で取り合いになっているらしい。それも間違いな  
い。

『どちらにも与せず立ち去る』という第三の選択肢は無さそうだ。  
どちらかを選ばなければ、この場から無事に離脱できそうにない。

その結論までは何とかたどり着いたが、今までの人生の中で下してきたどの決断よりも重大な選択を迫られていた。

そこへスーツの女が、頭の混乱に拍車を掛けるような行動に出る。女はジャケットの裾を跳ね上げると、腰の後ろに隠したホルスタ―から拳銃を抜き、真っ直ぐ黒津に構えた。

そして、ためらいもなく引き金を引き絞る。間をおかず2回。

強化樹脂を使用した銃の外観は、一見するとエアガンのようにも見えるが、銃声と共に銃口から飛び出したのは紛れもなく殺傷能力を有する実弾だ。

それまでの薄笑いが引つ込み、黒津の表情が驚きへと変わる。

しかし、正確に頭を捉えたはずの弾丸は、標的に命中することはなかった。

目標に到達する数十センチ手前で全ての運動エネルギーを使い果たしたかのように、2発の鉛玉は力無く地面に落ちる。

「この野郎！」

おそらく普段は使わないであろう言葉を、思わず、といった風口走った黒津は、右腕を水平に鋭く振り抜く。うなりを上げて衝撃波が女へと殺到する。

「だめえー！！」

今度は素子が予想外の行動に出た。

女の前に体を投げ出してかばったのだ。

強烈な力を全身に受けた小柄な体は、人形のようにはじき飛ばされ、音をたてて乾いた地面に叩きつけられた。

「あっ」

黒津が思わず声を上げる。

地面に横たわった体は、ぴくりとも動かない。

「何やってんの！殺しちゃったら意味がないでしょ」

「しょうがないだろ。こんな所でいきなり銃をぶっ放すとは思わなかったからよ。思わず手がでちまったんだよ！」

非難の声を上げた瑠美に言い訳する。

「蓮見さん！」

駆け寄った一真が抱え起こすと、

「う、うう…」

と小さな声を漏らして体を震わせた。

「なんとか生きてるみたいだな」

黒津の顔に、いつもの飄々とした表情が戻る。

その顔めがけて、女は銃を構え直すと、弾倉が空になるまで連射する。

放たれた弾丸は正確に黒津の顔面へと集中していたが、またもや狙いまで到達することは出来なかった。

黒津の足元にボトボトと鉛玉が落ちる。

女は空になった弾倉を素早く銃から引き抜くと、ホルスターと一緒に吊っているホルダーから新しい弾倉を取り出して銃にセットしようとした。

「姐さん、こんなところでやりすぎだ。銃声聞いた一般人に通報されちまうよ」

そう言って黒津は右手の人差し指と親指を立てて拳銃のような形を作ると、女に狙いを定める。

「バン！」

その声と共に、女の手から拳銃がはじけ飛んだ。空中でクルクルと回転すると、数メートル先に落ちる。

「バン、バン！」

落下地点へ駆け寄り、女に向かって、黒津の声が追い打ちをかけた。その表情は、まるで戦争ごっこをする無邪気な子供のように見える。

うめき声を上げて女が倒れると、

「俺は元々、素人さんは相手にしない主義だからさ。そこで大人しくしててよ」

そう言いながら、視線を一真の方へと向ける。

「玄人のお二人さんには一緒に来てもらおうかな」

身構える一真に向かって、すつと右手を伸ばす。

突然、のど元を大きな手で掴まれたような、そんな感覚に陥る。

「ぐ、うぐぐ……」

徐々に上がっていく手と連動して、一真の足は地面を離れ、その体は宙吊りになる。

「じゃあ、お嬢ちゃんも」

同じように素子へ向けた左手を上げていく。気を失いかけている少女の体が、無理矢理地面から引き剥がされた。

苦悶の表情から漏れ出る微かな声が、一真の耳に聞こえてきた。

「助けて…」

一真は無力感に襲われていた。

息をするのがやっと、声も出せない。

目の前の一人の少女も助けられない。

こんなになっても、まだ力が使えないのか。

近づいてくる金色の髪が、ぼやけて見える。

「じゃあ、そろそろ行くこうか」

黒津が瑠美に声をかける。

「待ちなさいよ！」

少女が黒津の方を向いた、その隙を逃すはずがなかった。

「あなたは自分のことを心配しなさい！」

渾身の力を込めて放たれた左足を何とか受け流しはしたが、おかげで少女は一真達から引き離されてしまった。

素早く黒津の背後を守る位置に入った瑠美が、少女の動きを牽制する。

「じゃあな、お嬢ちゃん達。今回は俺達の勝ち、ってことで」

背後の少女と、数メートル先に倒れている女へ交互に視線を向けると、捕まえた二人に向き直る。

その時、微かに開いた素子の目に、僅かだが力がこもる。

「くっ！」

黒津の右目の下に横一線の傷が浮かぶ。

「くっくっくっ、いいねえ、いい根性してるじゃない。だが、お遊びはここまでだ」

くぐもった笑い声を上げながら、黒津は傷口から口元まで流れてきた血を舌で舐め取ると、素子へ突き出した左手に力を込めた。

「う、ぐぐ…」

最後の力を振り絞った抵抗も抑え込まれ、もう為す術はなかった。小さなうめき声と共に素子の口から流れ出た一本の赤い筋は、やがて一つの球となって地面へと落ちる。

スローモーションのようにゆっくりと見える鮮やかな赤色の軌跡が、一真の心の奥底にあるもの刺激した。

何かが動き出す、そんな気がした。



「おおおおお！」

声など出ないはずだった。  
しかし、一真は吼えていた。

「おおおおお！」

その場にいた全員が感じていた

ゆっくりと、しかし力強く、確実に何か動き出していることを。

(14) 覚醒

少年の目に映っているのは、ある意味では普段通りの光景と言える。

目の前で助けを求めている女の子一人救えない。

悔しい気持ち

悲しい気持ち。

情けない気持ち。

腹立たしい気持ち。

それらが一つに混ざり合い、心の中で感情の波を打つ。

そこへ現れた『あきらめ』が全てを覆い尽くし、壁を作り、蓋をして、抑え込む。

どうすることも出来ない無力感に苛まれる。

日常と非日常の違いはあるが、いつもと同じ、繰り返されてきたことだ。

違う。

少年は反芻する。

違う。

出来ないんじゃない。

やろうとしていないだけだ。

今は、違う。

感情の波がその高さを増し、出口を求めて抗う。

そして、一粒の赤い雫が最後の壁を突き崩す。

運命が、動き出す。

「何なの？、どうしたっていうの！？」

自分の背後で起こったことがわからず、苛立ちを隠せない瑠美の言葉が飛ぶ。

そこには、一真を中心とした直径十数メートルの渦がうなりを上げていた。

まるで竜巻のように周りの全てを巻き込みながら、確実にその速度と大きさを増していく。

一真の咆吼が響き渡る。

焦点を失った視線が、明らかに正気ではないことを物語っている。

「見てのとおり、何だか目を覚ましたみたいでさ。そのまま『バツクラッシュ』しちまった」

「それは見ればわかるわよ。なんでこうなったのか聞いているの」

肩をすくめて黒津が答える。

「ちょっと、俺のおイタが過ぎたんだろうな。それで怒らせちまったんだと思う」

右手首の辺りをさすりながら、僅かに顔をしかめた。

「起きた途端に大暴れか、俺の甥っ子の機嫌が悪い時とそっくりだな。だけど、こいつは……」

改めて眼前の光景を見渡しながら言った。

「こいつは、とてもじゃないけど俺の手には負えないな。どうする？」

口を真一文字に引き締めたまま、同じように目の前の現状を見つめていた瑠美が、ようやくその口を開いた。

「確かに。2、3人が束になっても、どうこうできるレベルじゃないさそうね」

その言葉には、圧倒的な力の前に立たされた人間の無力感が滲んでいた。

「じゃあ、決まりだな」

「ちよつと、ちよつと！逃げるつもりじゃないでしょうね!？」

叫び声に近い少女の言葉に、振り返った瑠美が答える。

「私達、彼については手を引くわ。あとはそちらで自由にご勝手に。そう言った瑠美の体が次第に輪郭からぼやけていく。

「あ、待ちなさいよ！こうなったのもあんた達のせいでしょ!？」

少女の言葉を無視して、瑠美と黒津の姿が、既に辺りを支配していた闇と同化していく。

そして最後にはかき消すように見えなくなった。

「うん、もう!」

少女が呪いの言葉を吐いたとき時、ようやく倒れていたスーツの

女が起きあがってきた。

「香寿美さん！大丈夫!？」

「どうなってるの、これは？」

「その男の子が『バックラツシユ』したみたいで、『ラボ』の二人は逃げちゃうし、私だけじゃ抑えきれないの」

香寿美と呼ばれた女と、その傍らに倒れている素子は、一真が作り出した渦の中に取り残されてしまっていた。

「どうしよう、香寿美さん。だんだん渦が大きくなっていつてるみたいなの。このままじゃ……」

少女は広げた両手を重ねて前に突きだし、抑え込もうという体勢を取っていたが、その努力を嘲笑うかのように渦は成長を止めず徐々に大きくなっていく。

その一部は周囲の雑木林へと達していたが、外周部分に触れた木々は、あたかもグライダーを当てられたバルサ材のように一瞬で削り取られて消し飛んだ。

「……応援を……いや、いまさら間に合わない……どうすれば……」

女は、咆吼を上げる一真、倒れたまま動かない素子、渦の向こう側にいる少女、と視線をめぐるしく動かしていたが、一巡して一真に戻ってきたとき、フツと口元に笑みを浮かべる。

「……そうね……一か八か……」

そうつぶやくと、低い姿勢のまま地を蹴って疾駆した。

一気にトップスピードに達すると、そのまま右の拳を突き出す。

正気を取り戻した一真が最初に見たのは、自分のみぞおち辺りに手首までめり込んでいる腕の白さだった。

「え、あ、何？……」

だが、それも束の間、次の瞬間には再び意識がブラックアウトした。

.....

ボディーブローをくらった一真がダウンする少し前、逃げた二人の姿は直線距離にして3キロは離れた住宅街の中にある小さな公園にあった。

さっきまでいた小高い丘の頂上が、家々の屋根の間から僅かに見える。

腕組みをしながらそちらの方角を向いて立っている瑠美が独り言のようにつぶやく。

「バックラッシュは制御棒が無い原子炉で発電を続けるようなものだから。許容範囲を超えれば……」

「メルトダウン、か」

ブランコに腰掛けて缶コーヒーを飲んでいた黒津が、背後から合意の手を入れる。

チラリと振り返った瑠美が言葉を続ける。

「しかも、あれだけの力を出し続けている訳だから、そうなったときには気を失う程度じゃ済まないでしょうね。最悪、命に関わることになるかも……」

「しかし、ありゃ何だい？あんな力見たことねえんだけど」

そう言いながら左手に持ったコーヒーを飲み干す。

「バックラッシュは自制が効かない分、普段より強い力が出るものだけれど、それを差し引いてもあの子の力は尋常じゃないわね。これだけ離れているのに、今でも力のうねりを感じる」

「確かに、尋常じゃないかもな。避けたつもりだったんだけど、このぎまだ」

そう言っって黒津は右手を上げて見せた。

赤く腫れ上がった手首が痛々しい。

「さっきのはただの竜巻じゃないわ」

「どつという意味だ、そりゃ？」

「竜巻っていうのは、つまり空気の流れでしょ？でも、あの子が作り出した渦はそうじゃなかった。あんたも薄々感じていたんじゃないの？」

「ああ、確かにな。何て言うか、その、空間自体が動いているっていうか……」

そこまで言っって、ハツとした表情になる。

「まさか……」

「そう、その『まさか』の可能性があるわね」

「『空間操作』？あの坊主が？」

無言で頷く瑠美に黒津が話を続ける。

「しかし、そうなってくると話がややこしくなるな。課長どころか、もっと上に話がいくだろうし」

「それは仕方がないわね。何せ今までに……」

そこまで言ったところで、言葉を止めた。

二人の視線が同方向を向く。

無言のまま、何かを探るような表情をしていたが、やがて黒津が口を開いた。

「止まった、な」

「そうね」

黒津は座っていたブランコから勢いよく飛び降りた。

「あの女の子が抑え込んだのか、それとも……」

「そんな力は無いわ。多分、あの三咲って男の子が自滅したのね」

二人は、自分たちの予想が外れていることなど知る由もない。

「こっそり戻って事態を確認するべきなんだろうけど、今日はなんかもう疲れた。そこまでやる気にならねえな。」

「同感。」

瑠美は頷いた。

「いいわ、報告書では適当にごまかすから。」

そう言いながら、瑠美は横目で睨むように黒津の顔を見る。



「今日の件はあなたにも責任があるんだから、報告書、手伝いなさいよ。どうせ課長は明日の午前中にある定例の幹部会議に合うように提出しろって言うだろうし」

「えー？今日のことはとりあえず口頭報告でいいじゃん」

「そこが私達とキャリアっていう人種との差ね。あいつらは何でも報告書にして出せっていう考えだから」

「へえへえ、了解。あーあ、またデスクワークで徹夜か。これだから宮仕えはつらいよ」

黒津は手にした空き缶を、公園の隅に置かれているゴミ箱へ向かって放り投げる。

左手で投げたせいで、缶は狙いから大きく外れて飛んでいったが、急角度で進行方向を変えて無事にゴミ箱へと収まった。

ガランガランと金属同士がぶつかり合う音が、夜の公園に響く。

「それよりお腹空かない？どうせ朝までオールナイトなんだし、何かおいしいモノ買って帰るってのはどう？」

「おっ、いいね。じゃあ俺は……」

揃って公園を出た二人は、夜食を何にするか激論を戦わせながら夜の住宅街へと消えていった。

(15) もう一つの組織

水が沸騰する音と共に、室内にはコーヒーのいい香りが満ちてくる。

頭痛と腹痛のダブルパンチで目が覚めた一真の鼻に、その香りが入り込んできた。

「あ痛ててて……」

ソファから体を起こした一真の額から、冷やしたタオルが床に落ちた。

頭とみぞおちをそれぞれ押さえながら、霞む目で辺りを見回す。

どうやらビルの中の一室らしい。

応接セットに上等なデスクと椅子。

昨日、連れて行かれたオフィスの部屋と同じような造りだが、決定的に違うのは、実際に人が使っているように思える点だ。

デスクと正対せずにやや斜めになった椅子、半分開いた状態のブラインド、デスクの隅に置かれた写真立て……

そういったものが、部屋の主の姿を想像させる。

「気がついた？」

振り返ると、淹れたてのコーヒーをマグカップに注ぐ女の姿が目についた。

一真をノックアウトした、あの女だった。

改めて見ると、黒いスーツに包まれたしなやかな長身は、身長172センチの一真と同じくらいはあり、女性としては際立っている。

背中の中ほどまである艶めいた黒髪や、色白の肌、やや細めで切れ長の目などから、和風美人という言葉がぴったり似合う。

そんな外見からは、とても強烈なボディーブローを繰り出してくるようには思えないが、実際、一発でダウンさせられた相手だ。

無意識のうちに一真は身構えていた。

素性がわからない以上、警戒するしかない。

「今、飲み物を用意してるから。ちょっと待っててね」

そう言っただけで冷蔵庫から取り出したボトル入りのアイスティーをグラスに注ぐ。

「さっきはごめんね。まだ痛む？」

一真の前まで来たその女は、マグカップとグラスを乗せたトレイをテーブルに置いた。

「まあ、少し」

床に落ちたタオルを拾い上げながら一真はみぞおちの辺りをさすった。

頭痛は収まりつつあったが、軽い吐き気のような感覚がまだ残っていた。

「でもね、あのまま放っておいたら、君、とんでもないことになっていたかもしれないよ。まあ、ちょっと力を入れすぎたかもしれないけど、そのへんは勘弁してね」

一真の前にグラスを置くと、自分はソファに腰を下ろし、トレイから直接マグカップを手に取り、口をつける。

「そうそう、自己紹介がまだだったわね。私の名前は喜多香寿美。」

性別、女。年は……まあ見てのとおり、想像にお任せするわ」

口を開きかけた一真を、手を上げて制する。

「あなたのことはよく知ってるから、自己紹介は結構よ。三咲一真君、15歳、私立一条学園高等学校1年5組在籍。西都市内在住、家族は両親のみ、兄弟はなし。そんなところかな？……先月の遅刻回数は9回、それから……」

香寿美と名乗った女は席を立って、コーヒーメーカーが置いてある棚から何かを持ってきた。

「紅茶は甘目が好き」

そう言いながらグラスの横にガムシロップを3個、置いた。

「そのアイスティー、無糖のストレートだから。お好きなだけどうぞ」

絶句する一真を見ながら、香寿美は笑みを浮かべた。

「なんで知ってるかというとな、2〜3日前からあなたのことをストーカーしてたのよ。気づかなかったかな？」

警戒する顔色を濃くしたのを敏感に感じ取ったのか、香寿美は表情を元に戻した。

「ひとつ、信じてほしいのは、私はあなたに危害を加えるつもりはないということ。例えばそのドア、鍵はかかかっていないから、その気になれば君はいつでも部屋から出て行ける」

一真の背後にある、木製のドアを指差しながら言った。

「君が出て行こうとも、私は止めはしない。でも、それは私の話を聞いてからにしてほしいの」

確かに、一真は拘束されているわけでもなく、また冷やしたタオルは手当てをした証拠でもある。  
どうする？

真剣な表情の香寿美の前に、一真は考えをめぐらせていたが、ふと重大なことに気がついた。

「そういえば、蓮見さんは？」

「彼女なら病院よ」

「病院？」

「でも、心配なくていいわ」

香寿美は壁にかかったテレビを指差した。

「ちょうど、ニュースでやってるかもしれない。悪いけど、テレビつけてくれる？」

言われるがままに、一真はテレビのコントロールパネルにアクセスし、番組表からニュースを選択する。

60インチはありそうな画面に、見慣れた風景が映し出された。

「グッドタイミングね」

女性アナウンサーの声が聞こえてくる。

『今日午後7時ころ、西都市内にある丸山公園内で竜巻によるものと見られる被害が発生しました。現場では、林の木々がなぎ倒され、近くを通りかかっていた市内在住の高校生、蓮見素子さんが巻き込まれて負傷し、近くの病院へ搬送されました。全身打撲の重症ですが、幸い命に別状はないとのことです。警察と消防では現場を……』

そこまですで香寿美は電源を切る。

「ということと彼女は今、病院で治療を受けているわ。意識もはっきりしてるみたいだし、大丈夫よ」

あ那时的様子から、大怪我をしているんじゃないかと心配になったが、無事とわかりひとまず胸をなでおろす。

「そついえば、もう一人いたような……」

「ああ、佳奈はね、警察に行ってるわ。第一発見者つてことで事情聴取を受けてるはずよ。今日はここへは戻ってこないから、明日以降、また改めて紹介することになると思う」

記憶を手繰つてみたが、自分と同一年くらいの少女の後姿しか思い浮かばない。

ついでさっきのことなのに、所々の記憶が欠落している。

その原因は香寿美のパンチだけではないような気がしていた。

「それで、話を聞いてくれる気になった？」

一真は正直、迷っていたが、ひとまず身の危険はなさそうだし、聞くだけ聞いてみようという気持ちで答えた。

「とりあえず、話だけなら」

香寿美は「ありがとう」と言って、改めて話を始めた。

「どこから話をしたらいいかな……そうそう、なんで君を追い回していたかというとな、目的は『ラボ』と一緒に。君のようなウィツシユボーンを探して、私達の仲間になってもらったため」

「ウィツシユ……ボーン？」

「ああ、ごめんなさい。私達はね、あなたのような『力』を持った人の事をそう呼んでいるの」

ウィツシユボーン。

香寿美の話を聞きながら、ネットワークから辞書サイトにアクセスして調べてみる。

「何て出てる？」

「えっ？」

「今、こっそり調べてるんでしょ。何て出てるの？」

「あ、ええと……」

指摘されてしどろもどろになりながら、表示を読み上げた。

「wishbone： 鳥類腸骨、又骨、胸骨の前の二またの骨……骨？」

「そう、英単語として調べるとそうなるの。でも、私が言っているのは違う。」

綴りは『wishborn』。辞書には載っていない、『願いを叶える力を生み出す者』という意味でつけられた造語なの  
「ウィツシユボーン……」

もう一度、一真はつぶやいた。

「私達も、あの『ラボ』って組織も、ウィツシュポーンを探し出してスカウトしようとしているところは同じね」

香寿美は1枚の名刺を差し出した。

ペーパーレス社会といえども、こういった慣習的なものはなかなか無くならない。

高宮記念財団総合研究所

調査部調査第3課長

喜多 香寿美

名刺には、そう書いてあった。

「私達は、いわゆるシンクタンクと呼ばれる種類の組織でね、『高宮総研』とか単に『総研』とも呼ばれてる。その一部門として、私の課がウィツシュポーンに関する調査・研究を行っているの」

『ラボ』の二人とのやり取りを思い返すと、二つの組織が対立関係にあることは一真にも想像がたった。

「彼らは、ウィツシュポーンを集めている目的とか教えてくれた？」

「いえ、何も。仲間になつたら教えるだけ」

「そう、彼らのやりかたはそうね。私たちは逆。全ての情報を開示して、それで判断してもらおう。だからあなたにもわかる範囲のことは伝えるつもり。差し当たって、知りたいことの第一位は、自分がどうしてこんな力を使えるのかってことじゃないかな？」

確かに、一真にとっての一番の疑問はそこだった。



「その前に、高校生ってことは、思力技術について一通りの教育は受けてきてるはずよね？」

「はあ、中学のときに。高校でも月イチで授業があるから」

「でも、学校で習うことは表の話」

「表？」

「そう。表があるからには、当然裏の話もあるの」

一口、コーヒーを飲むと話を続けた。

「人間の発することの出来る思力波は極めて小さい出力だから、アンプの助けを借りて、やっと信号としての役割を果たせるだけの出力に増幅しているわけよね。」

香寿美は壁の方へ視線を向ける。

「そして、人から発せられた思力波は、単なる信号としての役割しかない。例えば、こんな感じ……」

テレビのスイッチを入れると、次々にチャンネルを変えた。

「学校では技術論としてそういったことを教えてもらったはず。でもね、稀に、そうごくごく稀に強い思力波を出すことができる人がいるの。アンプなんか無しでも充分すぎるくらいの出力。いいえ、それどころか通常の計測機器では振り切ってしまうくらい強力な思力波を発することが出来る人々」

電源が落とされたテレビの画面が暗転する。

「そういった人々の発する思力は、単なる信号では無くなる。自らの思念を乗せた思力波を発して、この世に存在するあらゆるモノに

干渉して、自分の考えているとおり、現実のものとする事ができる」

正面に向き直った香寿美は、一真の目を見ながら言った。

「そう、つまりそれがウィッシュボーンの力の正体、『思力による思考の現実化』ということ。そのメカニズムは完全には解明されていないけれど、実験結果から因果関係にあることはほぼ間違いないといわれている」

「つまり、俺もそうだ、ってこと？」

香寿美はゆっくりと頷いた。

「ウィッシュボーンの研究は思力技術の発見と時を同じくして密かに始められた。そして現在まで、それは続けられているの」

俄かには信じ難い話に、一真は首を捻る。

いきなり理解しろというのも酷な話ではある。

その様子を見た香寿美が口にした言葉は唐突なものだった。

「君、さっきテレビを操作したわよね？それからネットに接続してウィッシュボーンの意味を調べたりした。違う？」

一真には、話の意図がわからない。

「思力制御の機器を普通に扱っていた。そうよね？」

香寿美は立ち上がってデスクまで行くと、引出の中から見慣れた物を取り出す。

それを一真にも見えるように持ち上げて言った。

「あなたのよ」

反射的に首の後ろへ手をやるが、そこにあるはずのアンブは無かった。

「これで少しは信じてもらえたかな？私が説明してきたのが本当のことだって」

アンブを手渡しながら言った言葉に、同意せざるを得なかった。

現実には、アンブを装着しなくても香寿実の言ったとおり、機器の操作に何ら支障はなかったのだから。

答えが見つかったことで、ある意味、ホッとしていた。

当然、理解するところまではいってないが、一番の疑問点がひとまず解消されたことで、少し気が楽になっていた。

「で、俺達のような…ええと…ウィッシュブーンを集める目的っていうのは、何なんですか？」

「それを説明するには、まず『ラボ』について話をしないとね」

一真は瑠美の言葉を思い出していた。

「そついえば、あの人たち『公の機関だ』って言ってたけど、本当なんですか？」

「そつね。正式には『国立科学技術開発機構情報通信技術開発センター』っていうんだけど、科学開発省が所管する、れっきとした国の機関ね。あの進藤って子も、黒津って子も、正真正銘公務員。まあ君の想像するいわゆる国家公務員とは違って、特別枠での採用になってるみたいだけど、公務員であることにかわりはないわ」

「あの人たちの目的って、いったい何なんですか？」

「うーん、そこなんだけどね」

香寿美はちょっと難しい顔になる。

「実を言うと、私達にもはつきりとしたことはわかっていないの。彼らが何を目的としてウィッシュボーンを集め、研究をしているのか。実を言うとね、私達は彼らの行動を監視するために作られた組織なの。表向きは普通のシンクタンクとして活動しているんだけど、それはカモフラージュで、真の目的は国家による思力技術の独占と悪用の防止、そのための監視が私たちの仕事。まあ、大げさに言うとそういうことね」

一真は素朴な疑問を口にした。

「でも、なんでウィッシュボーンが存在が表に出てこないんだろう？っていうか何で公にしないんですか？監視するなら沢山の目で見ただほうがいいんじゃないかと思うんだけど……」

逆に香寿美が質問を返す。

「君、自分の力のことを親とか、友達に話したことある？」

「いや、話したことはないです。よくわからないけど、言うてはいけないような気がして……」

「君たち、ウィッシュボーンはね、何故だか同じような行動をとるの。同じ力を持つ仲間以外には、自分のことを打ち明けたりしない。みんな、そういう遺伝子が組み込まれているんじゃないかと思うくらい、例外なく。これは推測でしかないんだけど、特殊な力を持つ者特有の自己防衛本能じゃないかって言われてる。社会っていうのはね、異端の者に対してそれを排除する方向へと動くものなの。自分達の能力をひたすら隠すっていうのは、それから逃れるための手

段なのかもしれない。表に出てこない、まず、それがひとつの理由」

香寿美は、そこで一旦言葉を切ると、微妙に異なる口調で話を続けた。

「もうひとつは、もつと生々しい理由。考えてもみて。ウィツシユボーンの存在を世界中の権力者たちが知ったとしたらどうなるか？当然、争奪戦が巻き起こるでしょうね、そんな便利な力を放ってはおくはずがないもの。新たな対立の火種となることは必至。だから、国としても拡散しないように細心の注意を払って情報を秘匿しているの。奇跡に近いわね、今まで諸外国に知られていないのは。権力の中枢でも、この件について知っているのはごく一握りの者だけだといわれてるわ」

急にスケールが大きくなって、実感が湧いてこない。

一真は話のレベルを身近なところへと戻そうとした。

「もうひとつ、質問してもいいですか？」

「聞きたいことはひとつどころじゃないでしょ？」

「まあ、そうなんですけど…」

「いいわよ。いくらでも訊いて」

「さっき拳銃を使ってみましたよね？ということは、軍とか警察と関係があるんですか？」

猟銃などと違い、基本的に一般人には拳銃の所持許可は下りない。

この国で合法的に拳銃を所持しているのは軍人か、警察その他の法執行機関に属するものだけだ。

「このことね？」

香寿美の手に握られているのは、やはり紛れも無い拳銃だった。本物の銃を見たことがないのに、何故だか確信をもって言える。これもウィツシュボーン的能力なのだろうか……。

「非合法に決まってるじゃない。うちは完全に民間組織だし、軍と警察とは全くの無関係。見つかったら現行犯逮捕ね」

おどけた口調で言いながら、腰のホルスターに銃を戻す。

「いくらでも訊いて、って言ったけど、もうこんな時間だから今日のところはここまでにしましょう」

気がつくとき計は10時を回っていた。

「返事は今すぐに、とは言わないけどそんなに時間は無いの」

その言葉に、一真はデジャヴを感じた。

「彼らが君をこのまま放っておくとは思えないしね。なんせ、佳奈に言わせると『ありえないほどの力の持ち主』らしいから、君は」

立ち上がった香寿美は軽くウィンクをして見せた。

「このままだと君の争奪戦ってことになりかねないわね、期待のルキー君？」

昼食後の休み時間は、一真にとって貴重な就寝時間である。

しかし、いつもなら睡魔との戦いに無条件降伏している時間帯だが、今日は白旗を掲げる気配は全くない。

それなのに、あくびの回数だけが増えていく。

今も意に反して開こうとする口を無理矢理押さえ込みながら、昨日の自分の身に起こった出来事を頭の中で繰り返し返していた。

表通りに面した5階建てのテナントビル、一真達がいたのはその2階部分にあるオフィス内の一室。

『高宮記念財団総合研究所』という組織がどの程度の規模なのか全く知らなかったが、それでもこんな場所に本拠を構えるほど小さい組織では無いだろうと、狭い階段を下りながら考えていた。

ビルの1階は店舗になっていたが、シャッターが閉められていたので、何の店なのかはわからない。

その店の前に止められていたブルーのシトロエンに乗り込むとき、香寿美が教えてくれた。

「ここは分室みたいなものでね、『総研』自体は別の場所にあるの。いずれ、そっちも案内するかも知れないけどね」

結局、どっちの組織も同じような事をしているんだな、と妙に納得しながら助手席に乗り込み、自宅に帰り着いたのは午後10時30分。

自宅から遠くない場所だったこともあり、なんとか両親の堪忍袋の緒が切れる直前に辿り着くことができた。

実際、車に乗っていたのは実質10分ほど、そんな近い場所だったのかと驚いたくらいだ。

それから夕食もそこそこに、両親の追求からのりくらりと逃れてベッドへと倒れ込んだのだが、体は疲れているのに神経が高ぶって寝られない、そんな状態が昨夜から続いていた。

多くの出来事が起こりすぎた。

オーバーフロー寸前の脳を整理してみるが、詰まるところ二つのオフアアのどちらかを受け入れざるを得ない状況に立たされている。『どちらにも与せず』という第三の選択肢は失われている。

自覚はないのだが、どうやら自分は『ありえないほどの力の持ち主』らしい。

そうなると、一度拒絶したとしても相手が放つてはおかないだろう。

逃げ切ることは至難の業、というより昨日の両組織の争いを目の当たりにして、それは不可能に思える。

実は一真の中で二者択一の答えはほぼ決まっていた。

昨日の体験から、どちらを選択するかは自明の理。あとは『踏ん切り』がつくかどうか、それだけだ。

「うーん」

決断の齎を手に、気持ちは同じ場所を行ったり来たりしている。

(そう言えば……)

自宅へ送ってもらおう車中で香寿美は『また連絡をする』と言っていたが、よく考えると一真は自分の電話番号も何も教えていない。

(どうやって連絡してくるんだろう?)

ふとそんなことを思い出したのは、現実逃避に他ならない。

『踏ん切り』をつけなければならぬ、その瞬間を先延ばしして、



体よく逃げようとしているだけだ。

ずっとそんな調子で考え事に没頭していたから、教室の扉が勢いよく開いたことにも気が付かなかった。

一真以外の男子生徒の目が一斉に釘付けとなる。

遠慮無く入ってきた少女は、ひとしきり教室内を見渡すと、すぐに目標を発見した。

羨望の眼差しを一身に受けながら、少女は大股で部屋を横断してまっすぐ一真の前進む。一真はスカートに正面の視界をふさがれて初めて少女の存在に気が付いた。

「三咲……一真君ね」

顔を上げると、端正な顔立ちの少女が見下ろしている。

吸い込まれそうな大きな瞳に、ちよつとだけドキツとした。

「香寿美さんが昨日、連絡するからって言ってたでしょ？早速来たわよ」

「あつ、昨日の……」

記憶と目の前の現実が一致した。

（ああ、そうか。ウチの制服だったんだ）

昨日はそんなことにすら気が付かないほど余裕がなかったが、改めて記憶を辿ると確かにあの時、少女は一条学園のブレザーを着ていた。

「今日の放課後、ヒマ？」

唐突な質問に一瞬、言葉が詰まる。

「えっ？ああ、うん。特に用事はないけど…」

少女の口元が緩む。

「そう、よかった。じゃあ放課後、正門で待ち合わせね」

「え？ちよつと、待ち合わせってなんだよ？」

「香寿美さんから、君にいろいろ教えといてって頼まれてるの。学校じゃ人目があるし、どこか別の場所で話しをしましょ」

現在の状況も十分に人目を引いているというか、注目的になっていることには気付いていないようだった。

「それじゃ」

右手を挙げて敬礼のような仕草をすると、くるりとターンを決める。

啞然として声も出ない一真を置いて、来たときと同じルートを逆に辿って教室を後にした。

入ってきたときと一つ違うのは、教室内の生徒の視線が羨望から疑問へと変わったことだ。

少女が廊下へと消えると、早速、忠典が小走りに一真の所へやってきた。

「おいおいおいおい！三咲、どうなってんだよ！？お前、美波さんと知り合いなのかよ？」

「え？ああ、まあなんとなく」

さすがに昨日の出来事を話すわけにはいかないので、適当に生返事を返す。

「それよりさあ、生野、お前もあの子のこと知ってるのか？」

忠典は信じられないといった表情になった。

「お前なー、当たり前じゃねーか。上半期ミス一条の投票で、4期連続一位を守ってる3年生の江本香織さんにあと3票まで迫ったユーアイドル、美波佳奈を知らないやつはいないぜ」  
「そういえばそんな投票があつたかな」

よくある校内人気投票の類だが、誰に投票したのか記憶がない。  
白票だったかもしれない。結果など知る由もない。

「でも、やっぱりいいよな、美波さんは。秀才揃いの1組の中でも成績はトップクラスだし、才色兼備ってのは、ああいう人のことをいうんだろ。おまけに弓道部だろ？あの袴姿がたまらないんだよなあ」

弓道場をのぞき見た時のことでも思い出しているのか、忠典はうつとりとした顔で遠い目をしていたが、ふと現実に戻ったかのようになり真顔になった。

「でも、美波さんがお前なんか何の用があつたんだ？」

勢い込んで訊いてくる質問に、淡々とした表情で答える。

「デートのお誘い」

「な、な、何いー!？」

それから何かまくしたてていたが、一真の耳には全く届いていなかった。

佳奈の姿には、香寿美が重なって見える。

一真は決断を促される焦燥感に襲われていた。

休み時間の終わりを告げるチャイムが、そんな気持ちに拍車をかけた。

.....

西都市の東部に広がるなだらかな丘陵地帯には、市と県が『アカデミック・エリア・プラン』という名の共同事業の下、積極的に誘致を推進した結果として大学や企業の研究機関などが数多く所在しており、学研都市として発展しつつあった。

その東の外れに位置する広大な科学開発省保有地の一角、そこに『国立科学技術開発機構』がある。

事務部門が入る管理棟、研究開発棟や実験設備、倉庫その他主なものだけで大小50を超える施設を擁する一大拠点となっている『ラボ』こと『情報通信技術開発センター』は、その敷地の一番奥まった場所にひっそりと佇んでいた。

建物のすぐ裏に山裾が迫っていることからわかるように、敷地の中では最も標高が高い場所にあることから、屋上に上がれば眼下に市内の街並みを望むことが出来る。

屋上にはベンチやテーブルが置かれ、勤務する職員の休憩場所となっているが、昼休みがとくに過ぎ去った午後2時過ぎという時間帯には、一人を除いて人影は見当たらなかった。

その一人、黒津圭次は屋上でも最も高い場所、貯水タンクの上で景色を独占しながら寝転がっていた。

時折通り抜ける風が心地よい眠りを演出してくれる。

「やっぱり、ここにいたのね」

足元から聞こえてくる声に午睡のひとときを中断させられた黒津が目をこすりながら体を起こすと、見上げる瑠美と視線が合う。

「課長がヒステリー起こしてたわよ。『黒津はどこ行った』って」「小学生みたいに『先生、おしっこ』とでも言ってから出てくればよかったのかよ？」

うーん、と大きく伸びをした。

「くだらねえ話に我慢して付き合うほど心は広くないんでね」

「大人じゃないわね」

「何とでも言ってくれ」

午前中に行われた幹部会議では昨日の一件が議題となり、結果としてウィツシュ・ボーンの『取り込み』に失敗したことに対する批判が相次いだという。

彼らの上司である課長の機嫌はすこぶる悪かった。

「そつえばあの話、結局誰がやることになったんだ？」

「気になるの？くだらない話なの？」

「くだらないからこそ気になるんじゃないか。不幸な子羊は誰なのか」

さつきまで行われていたミーティングは、ミーティングとは名ばかり、課長からの命令伝達の間でしかなかった。

誰に命令が下ったのか。

「はづきとタケル君。ついさっき一人で出て行ったわ、現場実査だと思っけど」

大きなため息は、下にいる瑠美の耳にも聞こえてくるほどだった。

「恥の上塗りにならなきゃいいがな」

「そんなに心配なら課長に言ってみたら？ 『恐れながら中止された方が賢明と判断されますが』 ってね」

「本気で言ってるのか？ 俺は心が狭い上に面倒くさいのと怒鳴られるのと嫌み言われるのが大嫌いだからな。わざわざ自分からその真っ直中へ飛び込んでいくような酔狂なマネはご免だね」

ゆるゆると立ち上がると尻の辺りをパンパンと両手ではたく。

「全部が全部、成功するわけがないんだからな。それを1回の失敗であれだけテンパッて、おまけに必要性に疑問符が残るようなアクションを起こそうってんだから……」

二人の間に、しばし、沈黙の時間が流れる。

「そういえばさ、昨日の『取り込み』を手伝ったらデートに付き合っって約束だったな」

大事なことを忘れてた、といった表情だ。

確認を求めて投げかけてくる視線を、瑠美はフツと外した。

「でも失敗したからその話は無しね」

「そりやおかしい。あの時は『ケリがいたら』って条件だったろ？ 成功失敗は関係なく」

食い下がってくる言葉に、半ば呆れ顔で瑠美は肩をすくめた。

「そういうところだけは良く憶えてるのね……まあ、いいわ、約束だから。行きたいときはいつでも言っ」

「あ、でも、今日はだめだな」

「なんで？」

黒津は貯水タンクの上から飛び降りる。

「ちょっと野暮用ができまっ」

「さ、下手なウイंकは、相手を苦笑いさせるだけの効果しかなかった。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9867v/>

---

リアライズ

2011年9月30日14時58分発行